

令和元年度秋季企画展  
関連フォーラム

# 桑野遺跡から見た 縄文世界

2019年10月6日（日）

於・あわら市市民文化研修センター 大ホール

主催／あわら市教育委員会

後援／日本玉文化学会

## フォーラムスケジュール

- 10：00～10：10 開会のあいさつ（あわら市教育委員会 教育長 大代 紀夫）
- 10：10～10：30 基調報告：「桑野遺跡の概要」  
橋本 幸久（あわら市郷土歴史資料館 館長補佐）
- 10：30～11：30 特別講演1：「東北アジアから見た桑野遺跡出土の玉玦」  
鄧 聰（タン チュン）（香港中文大学中国考古芸術研究センター教授）
- 11：30～12：10 特別講演2：「韓国の玦状耳飾研究の現況と様相」  
河 仁秀（ハ インス）（臨時首都記念館館長）
- 12：10～13：00 昼食休憩
- 13：00～13：20 ①「玦状耳飾の製作技術について」  
パネラー：松井 政信（株式会社キミコン埋蔵文化財調査室長）
- 13：20～13：40 ②「桑野遺跡の石製装身具の石材」  
パネラー：中村 由克（群馬県下仁田町自然史館館長）
- 13：40～14：00 ③「広域に見た北陸の土器群」  
パネラー：澁谷 昌彦（株式会社玉川文化財研究所）
- 14：00～14：20 ④「北陸域における在地土器」  
パネラー：谷藤 保彦（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団専門調査役  
大正大学非常勤講師）
- 14：20～14：30 10分間休憩
- 14：30～14：50 ⑤「墓域と玦飾から見た桑野遺跡の集団構成」  
パネラー：藤田 富士夫（敬和学園大学人文社会科学研究所客員研究員）
- 14：50～15：10 ⑥「民族誌から見た耳飾りの機能と用途」  
パネラー：高橋 龍三郎（早稲田大学教授）
- 15：10～15：25 ⑦「本日のフォーラムを聞いて」一言コメント  
コメント：鄧 聰（香港中文大学中国考古芸術研究センター教授）
- 15：25～15：35 質疑・応答（10分程度）
- 15：35～15：40 閉会のあいさつ（あわら市郷土歴史資料館長 佐藤 雅美）

# 東北アジアの早期軟玉文化情報革命の伝播

## —日本桑野遺跡玉器の来源について—

鄧 聰 (香港中文大学教授)

### 1.はじめに

1990年前後に、私たちの東アジアの早期玉器の認識に関して大きな発展があった。1982年に中国の著名な考古学者、夏鼐先生が、中国の玉器文化には4000年の歴史があると指摘した。しかし、1989年に中国の地質学者の聞広先生が、中国東北地域の遼寧省査海遺跡から出土した5点の玦飾、2点の匙形器を測定し、それらは全て軟玉（ネフライト）であることを実証した。中国で最も早い玉器の起源年代は、突然に3000年あまりも繰り上がり、かつ玦飾、匙形器は等しく優質の軟玉が用いられており、真玉（軟玉あるいは翡翠）文化の発達程度は、これまでの研究者の予想を遥かに超えるところとなった。

しかし引き続いて1989年から数年後の1992-94年に、日本の福井県桑野遺跡の考古学的発掘によって劇的な発見がなされた。なんと軟玉製の玦飾、匙形器、管飾、玉器の形やつくり、組み合わせ、これらの全てが査海玉器と大変似ていたのである。両地域の地理的な位置空間は離れている。数千キロ以上離れており、しかも両方の間には、人が越えるのに困難な日本海があるのである。同様に、1992-94年の間に、内蒙古興隆窪遺跡でもまた、査海と類似した玉器が発見された。それらは保存が良好で風化を受けておらず、鮮やかな黄緑色と大振りの形態は、人々に7000-8000年前の中国東北地域の精美な玉器の様相について、さらに確かな認識を与える所となった。

1989年から、ちょうど30年を経た今、桑野遺跡の正式報告書が2019年に刊行され、国際学界の注目を浴びている。近年、東北アジア中国、ロシアシベリア、朝鮮半島で相ついで年代が比較的さかのぼる玉石飾物が発見され、これらの総合的な比較分析が出来るようになった。今のところ、いったい東北興隆窪-査海文化と桑野、両者の玉器はどのような関係にあるのだろうか？。東北黒竜江省小南山遺跡の約9000年前の玉器は、興隆窪-査海文化玉器の前身であろうか？。ロシアシベリア・アルタイ地方のデニソバ（Denisova）洞窟では30000年余前の玉石製ブレスレット（腕輪）が出土しており、製作技術上で後来の東アジア新石器時代環状玦飾はそれと淵源関係があるのかどうか？。以上の幾つかの問題について、筆者の試論を簡単に発表して皆様のご批評を頂きたいと思っている。

### 2.デニソバ洞窟のブレスレット

2008年にロシアの著名な考古学者A.P. Derevianko等が発表したところでは、シベリア西南のアルタイ地方のデニソバ（Denisova）洞窟の東室の入り口、第11-1層の最下部から1点の玉石製ブレスレット（腕輪）の破片が出土した。このブレスレットが出土した時には既に欠けていて不完全形で、元の半分のみであった。けれども、近くに中央で破断したおお



圖版一

- a. 瑪爾他遺址出土 23,000 年前象牙手鐲素材
- b. 同上手鐲毛坯
- c. 丹尼索亞 38,000 年前綠泥岩玉石手鐲
- d. 同上玉手鐲折斷面上研磨痕跡
- e. 刮削及敲打技術實驗製作綠泥岩手鐲

よそ対称形を成す1点があり、この2点は互いに接合した。両者は0.75m離れて出土した。研究者が指摘するブレスレットの出土層位は、動物化石および石器類型とともに等しく晩期旧石器時代の早期段階を示している。ロシアの学者はこのブレスレットの年代について、3~4 万余年前と推断している。このブレスレットの材質は緑泥岩 (Chloritolite) である。この種の岩石鉱物はシベリア・アルタイ地方の西北地区では、今なお未発見である。ただし西南アルタイの一部の地区では、すなわちデニソバ洞窟から約 200 km離れた所では、すでに同様の岩石鉱物が発見されている。

このブレスレットの幅は 2.7 cm、厚さは 0.9 cm、外径は推定で 7 cmを成す。かなり大きい (図版一・C)。製作技術の面で、ロシアの学者はブレスレットの表面の痕跡から、分割プロセスについて以下いくつかの工程を呈示している。

- a. 楕円形で厚みのある素材を制作し、素材の両面を砥石で平に研磨し、四隅を円形に磨く。
- b. 素材の片面の中心位置から、上下に小孔を穿って孔を開ける。ただし出土したブレスレットの残片では本来の中心部の痕跡はもちろん観察することはできないが、ただ砥石を用いて加工したであろうことは推測できる。ブレスレットの裏面の不規則な研磨面から、手持ちの砥石で研磨された可能性がうかがえる。彼らはブレスレットの中心孔は錐で穿ったものではなく、研磨形成によるものと推測している
- c. 玉製ブレスレット形成後、一側面に錐で一小孔が作出されている。一種の比較的安定 (ぐらつかない) した穿孔具が用いられている。穿孔は少なくとも三段階のプロセスで進められている。穿孔工具の回転速度は、相当速いと思われる。ほかに、ブレスレット形成後の使用および破損の痕跡が残されている。

ここで先ず論じたいのは、上記の玉製ブレスレットの中心孔製作の技術である。筆者は、デニソバ洞窟から出土した大量の玉石製飾および骨角製垂飾を観察した。小型穿孔の痕跡は、みな相対的な位置に見られ、その個所は割削により薄くカットされ、中心位置が貫通するまで、さらに口径が拡大するほどまでに成される。

私たちは、玉製ブレスレットの中心孔は、また同様の技術で開けられていると思っている。

このことで、私たちは 23000 年前の馬耳他 (Malita) 遺跡での発見を参考にしたい。Gerasimov M.M. が 1956-57 年に発掘した馬耳他遺跡では、一点の未完成なマンモス牙で作られたブレスレット素材が発見された。中心位置は割削によって一個の大きな凹槽を成していた。ほかに一点の象牙製のブレスレットの成品が発見され、表面にはなお、割削による平坦ではない表面を見ることができた。筆者はモスクワ国立博物館で、この 2 点の馬耳他の遺物の観察を行った (図版一 a, b)。2018 年の夏、私たちは緑泥岩を素材として予備的実験を行った。主に石片および石ハンマーを用いた。石片は割削用に、石ハンマーは敲打および研磨に用い、両者を組み合わせて 25 時間余りの作業をし、ついに一点のデニソバ出土のブレスレットと似た複製品を完成した。これは、実験考古学の予備的な試みである (図版一 e)。

最後にデニソバの玉製ブレスレットの破損に関して述べたい。この玉製ブレスレットの左右両端を見ると、3号面は一端が平らに整えられている。2号面は別の一端の穿孔に沿って傾斜破裂している。1号面は破損して残ったブレスレットの中央で破断している。筆者の観察では、1号面（図版一 d）は施溝後に再折断し、残りのブレスレットを半分にしており、これは再利用の準備かもしれない。それゆえ、この残ブレスレットは洞窟の中に持ち込まれて、洞窟内で二分に折断加工されたと解釈できる。それゆえ、この折断された玉製残ブレスレットの出土位置は、基本的には双方ともに近い同一空間にある。2号面は意に反して破損したらしく、その破砕面は研磨されていない。3号面はもし解釈が許されれば、第1号面が折断され分離した後に、元の3号面の位置に研磨加工が施されたとできよう。このように本来のブレスレットの残り半分は弯曲条形器に似通った飾物に改変された。しかしてブレスレットの別の半分は、再利用された。

私は、玉石製ブレスレットは当時、かなり貴重で、かつ象徴性の意義を具有する器物であったので、簡単に放棄できなかつたものと推測する。玉石製ブレスレットは、人体に直接帯びるものであるに違いなく、7cmの外径は、完全に人類の手腕を飾るのにふさわしい。過去、旧石器時代晩期で発見されていたマンモスの牙製ブレスレットも、また、この事例に良く合う。しかし玉石製ブレスレットを身に帯びる事と、後に行われる玦飾を耳部に装着する事と、両者には基本的に共通するところがある、いずれも人類が玉石製の環状飾物を帯びる行為なのである。環状飾物の意図的折断、また折断面を研磨して平滑に整えるに至った、このことは、さらに玦飾製作技術の最も重要な方式（やり方）となったのである。

### 3. アジア最古の砂縄切割技術の使用

近年、黒竜江省饒河県烏蘇里江畔の小南山遺跡で大量の玉器が出土した。年代は今から9000年前後で、今日の中国玉器起源の問題を検討するための重要な発見である。小南山遺跡の最新の玉器出土の問題に関して、私と李有鸞は『桑野遺跡』（あわら市埋蔵文化財調査報告第三集、2019.3）報告書で簡単に紹介した。ここに私たちは、さらに2つの視点を補足したい。第1：1991年小南山の最高地点に規模の大きな展望台が建設され、1号墓から副葬品が全部で126点、そのうち玉器は67点発見され、それには玦飾、環、珠、斧、矛、匙、簪（かんざし）と斧があった（図版二）。これらの玉器は現在、黒竜江省博物館で展示されている。小南山の67点の玉器中、環が45点を占める。1996年に公開された報告の実測図（M1：59の玉環の表面のように）によると素材に砂縄切割の痕跡が残っている。筆者は2019年5月ハルピンで91年小南山遺跡出土の玉環をつぶさに観察し、その中の素材の多くは明らかに砂縄で切割されており、加工技術における砂縄連続切断は、玉片の素材を生産するのに非常に成熟した方法である。ほかに玉石素材M1：86もまた、砂縄連続切断技術で成された事を示している。したがって、私たちは小南山の玉原料加工の工程で、軟玉への砂縄連続切割の使用は主要技術であったと確認できる。玉環以外、玦飾は11点ある。すでに報道されているようにM1：21の玦飾の外径は10cmにもなる巨大なもので、器表面は研磨



図版二 黒龍江小南山遺址出土玉器 (a-f)

され光沢を放っている。玦飾M1:1の外径もまた大きくて9.4 cmある。M1:9の外径は7.4 cmで、M1:13の外径は10 cmある。小南山の玦飾はみな玉環と比べて体積が大きく、製作も精緻であることは明らかであり、この時代の玦飾の社会的価値を示している可能性があり、環状玉器中で最も重要な役割を果たしている。

91年小南山M1墓出土玉器の年代について、最近、吉林大学の趙賓福氏は、早期は8000-7000年および7000-6000年の2つの期間に分けられることを提案した。私は、近年の小南山遺跡の年代測定結果に基づいて、91年小南山M1墓出土玉器の年代を、9000-8000年の段階で考えている。もし、この年代が正しいとすれば、北東アジア地域での玦飾、匙形飾の出現年代は、現在知られているよりも1000年早くなる。東アジアで最も早い玦飾、匙形飾は最初、烏蘇里江流域に出現したことになり、同類型の玉器をもつ興隆窪-查海文化起源説

にとって変わるところとなる。

2019年第8期『考古』では、2015年の小南山の発掘簡報が発表され、玉器発見の詳細が報告された。簡報によると、玉器は、玉製の管・斧・珠・璧・玉材数類が含まれている。その中の珠、璧は大きな割合を占めている。筆者鄧の所見では、一面は扁平で、別の一面は円凸璧形飾をしていて非常に特徴的である。その中の璧形飾の素材の多くは砂縄切割技術で切断されている。

李有騫は小南山1991と2015年出土の玉器を比較して、玦飾、環、匙形器は2015年の発掘では発見されず、小玉璧と玉管は1991年の出土玉器中には見つからなかったとしている。現在の発掘状況によれば、1991と2015年に発掘された墓の間には、時間差あるいは社会階級の違いがある。ただし、両者ともに環状玉器が普遍的に存在し、砂縄を使用した製作技術は熟達の域に達しており、玉珠、大型玉斧および弯条形垂飾の存在も共通する。したがって、現時点で私たちは、1991と2015年に小南山で出土した玉器の年代に多少の違いがあると推測できるが、それらはまだ比較的近い年代にある。この観点から、1991年の小南山遺跡で出土したのは、今日の東アジア大陸で発見された最古の軟玉製玦飾、匙形器および管飾であると出来、興隆窪—查海文化の玉器の来源について重要な手掛かりの提供となった。

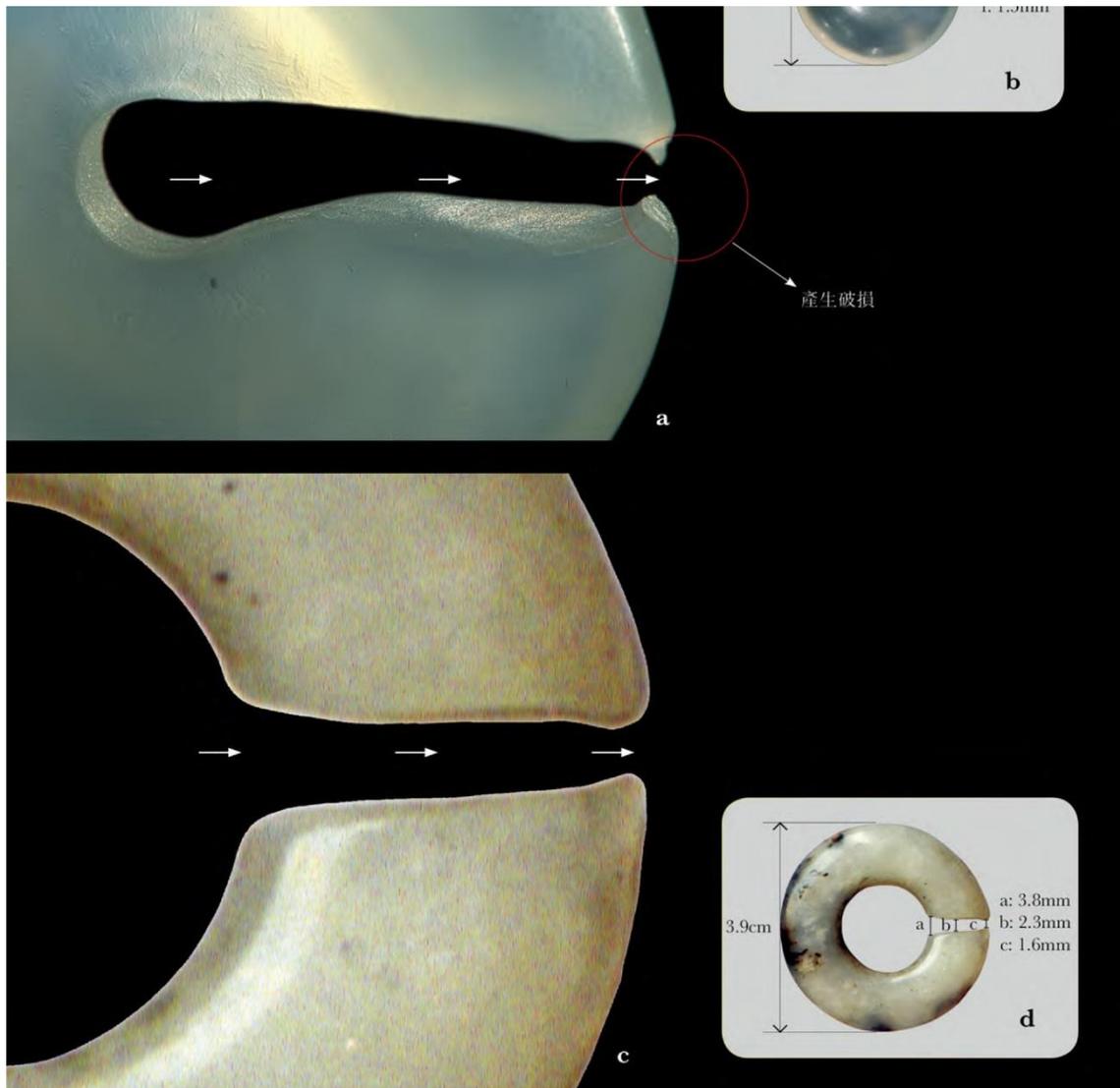
#### 4. 桑野遺跡へのアジア真玉文化の伝播

約8000年前、北東アジアの黒竜江の下流域では、軟玉製の玦飾、匙形器および管を代表とする真玉文化が現れた。その背後にあるのは、豊かな宇宙と宗教思想の象徴を包括するに違いない玉文化の最初の情報革命とみなすことができる。この玉文化の創造性、中心地区から外側への拡散の速度と強さを伺うに、そこには軟玉文化の情報革命自身が持つ強力でしかも持続的な影響力を体現している。

桑野遺跡出土玉器の発見は、東アジア大陸で8000年前に出現した真玉文化の情報革命が周辺へ直接輻射し、遠距離へ伝播した証拠であり、最も重要な考察の根拠を提供するものである。

桑野遺跡で出土した玉器と東アジア大陸との関係をどのように実証するか、その実証には確実に、長期的な検討を必要としている。日本の藤田富士夫先生と川崎保先生は、桑野遺跡の玉器の来源について、数多くの精細な考察を行ってきた。今のところ、玉器の出現だけから考えてみても、玉器の形式、組み合わせ、玉器の類型学と玉材の鉱物学、玉器出土集落の考古学的分析に至るまで、すべて潜在的な研究発展につながる。

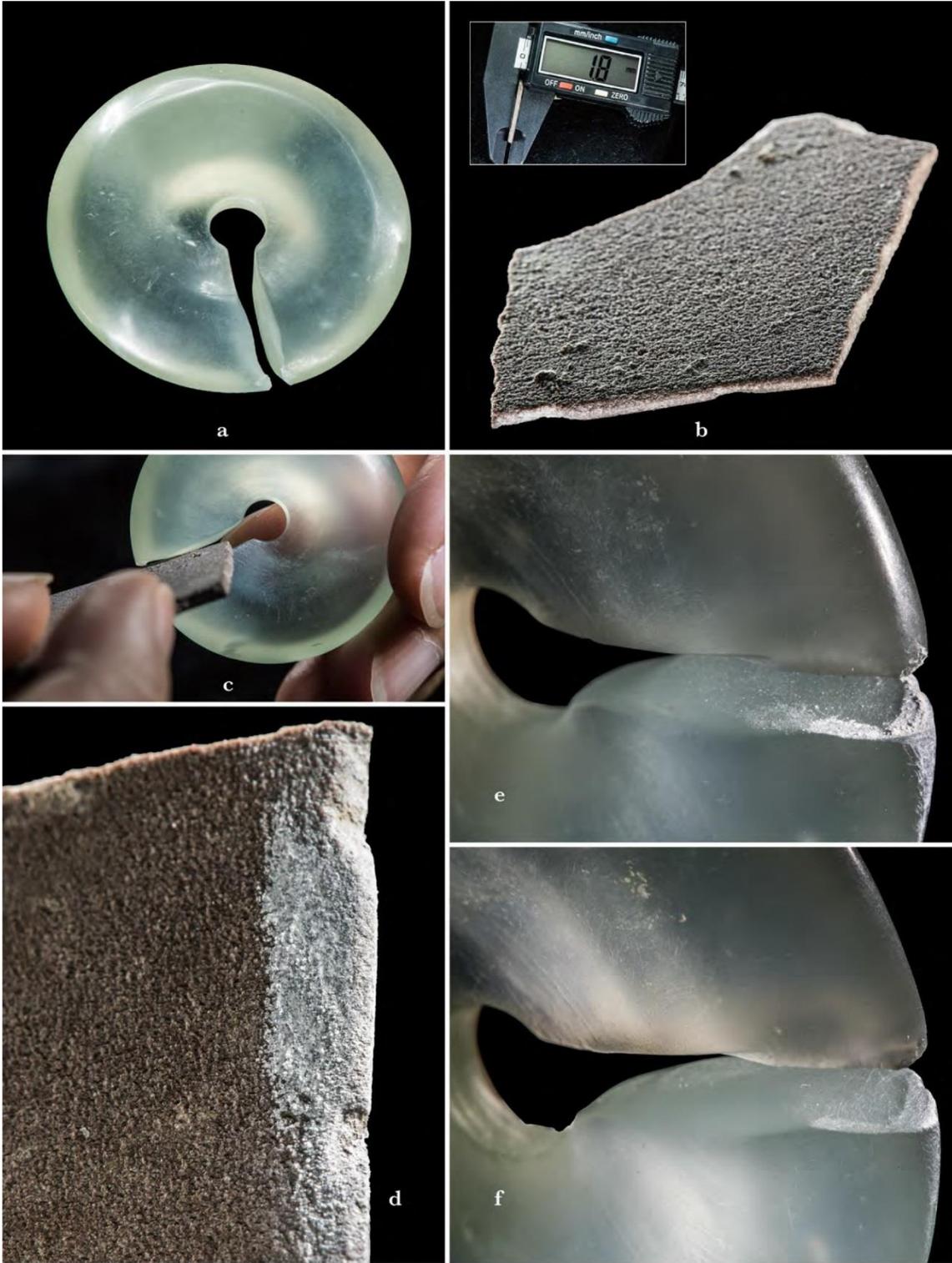
筆者は、玉器技術面に焦点を当ていくつかのつたない見解を発表してきた。2007年には『以柔克剛』で、桑野遺跡玦飾kw65、kw66の切目が砂縄切割で切断されており、それは興隆窪、興隆溝遺跡の玦飾の切目作出技術と同じであることから、両者間の文化交流関係を工藝面から論証した。最近、私たちは『桑野遺跡』で報告された《白色材》玦飾の所見から、玦飾の切目作出技術に砂縄切割(kw65)と鋸片切割(註…擦切り技法)(kw52)の二種類あ



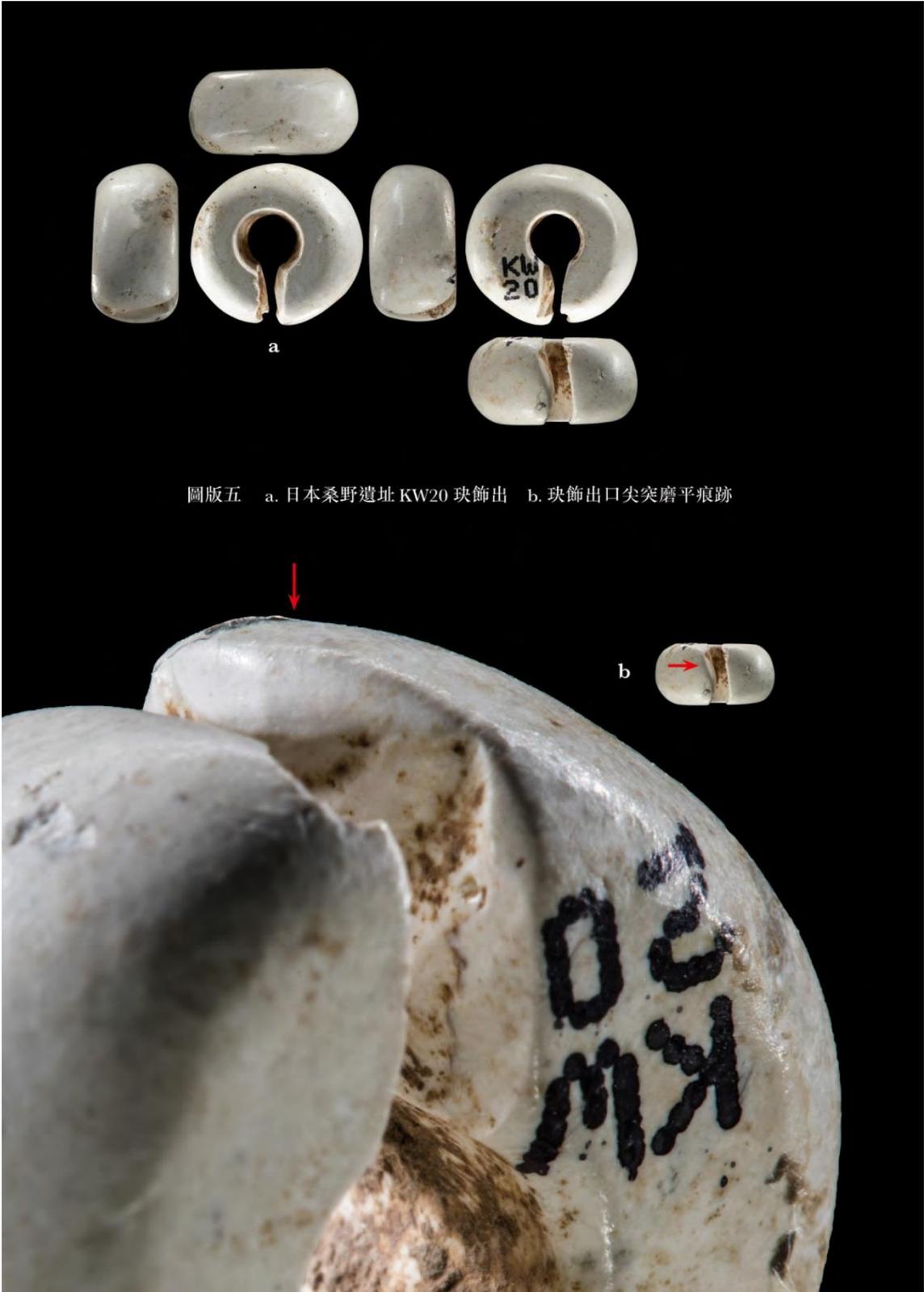
図版三 a, b 玦飾製品実験尖突 c, d 鬼門洞玦飾尖突

ることを知った。また同様に、興隆窪遺跡の玦飾の切目でも砂縄切割（M130）と鋸片切割（M108）による作出が行われている。桑野遺跡と興隆窪遺跡の切目作出は同様に複合的技術が用いられているところが、互いに完全に一致している。

次に、2019年の『桑野遺跡』報告書で、筆者は査海遺跡での軸受けの発見を紹介した。興隆窪－査海文化の中の僅かな玦飾ではあるが、轆轤技術加工が用いられている可能性があり、比較的正円に近い玦飾が製作されている（例えばM130玦飾）。桑野遺跡から出土したkw69、kw68、kw65玦飾の外縁は、比較的正円に近い形状を成して、轆轤機械と関わる製作の可能性があると推測している。ほかkw71、kw72玦飾の外形は、円形状コントロールが比較的弱く、これらは轆轤機械で製作されたものではないようである。Kw79玦飾の断面は上が小さく、下が大きく傾斜していて、管錐の錐芯（註…残芯の再利用）加工による玦飾の可能性ある。桑野遺跡において現地産（註…列島産）の石材で作られた玦飾は、



图版四 砂绳切割玦饰出口的尖突研磨实验 (a-f)



圖版五 a. 日本桑野遺址 KW20 玦飾出 b. 玦飾出口尖突磨平痕跡



圖版六 中國興隆窪遺址玦飾出口尖突磨平痕跡  
a. 興隆溝遺址 b. 興隆窪遺址



図版七 桑野遺跡と錫本包楞遺跡の匙形器

円形の規則性が比較的弱く、いずれも轆轤機械による加工痕跡は見られない。

以下に、私たちは玦飾の切目作出の問題について、簡略に述べたい。砂縄が中心孔から切目の前端まで引っ張られる動作が成されると、しばしば2つの鋭い突起（註…尖突）を形成し、鋭い突起の位置は破損の作用に関係している。切目の鋭い突起の形成は当然のことながら、玦飾を装着する時に耳たぶの肉皮を傷つける可能性がある。したがって職人はフレーク状砥石を用いて、砂縄切割された切目の尖突を平らに研磨している（図版三）。

2017年私たちはノヴォシビルスク考古学会の会議で、実験考古学の方面から鬼門洞（Cherty Vorota）出土の玦飾の缺口と、尖突の平滑化に関する研究を発表した（図版四）。桑野遺跡 kw20 は、長さ 16.5 mm、幅 17.1 mm、厚さ 10.1 mm で、同遺跡で出土した最小の軟玉製玦飾である。報告書は正確に kw20 の切目は砂縄切割（糸切技法）で作出されていると指摘している。筆者の kw20 切目の観察では、切目前端が円く磨かれており、かつて（註…製作時に）尖突が研磨加工が施されていた（図版五）。興隆溝と興隆窪遺跡ではいくつかの玦飾の砂縄切割技法による切目作出において、同様な缺口の尖突研磨加工を見ることができる（図版六）。

さらに匙形器に関して、桑野 kw49（筥状垂飾）は、長さ 132.3 mm、幅 32.6 mm、厚さ 8.2 mm と体型は大きく、現在のところ日本列島で発見されている中で最大の軟玉製匙形器である。中国では、1982年に内モンゴバ林右旗錫本包楞で一点の匙形器が出土した。それは、長

さ 149 mm、幅 27 mm、厚さ 9 mmである。錫本包楞と桑野の匙形器の形態はかなり近似しており、錫本包楞の長さは桑野よりは 17 mm長く、桑野の幅は錫本包楞よりは 5 mm大きい。両者の厚さは殆ど差がなく 0.8 mmである。両地の匙形器の形態、大きさは相当一致している。製作技術の面から分析すると、kw49 は表面が凹槽を成して、明らかにおびただしい琢制による凹坑（ピット）が成形されたと見ることが出来る。凹坑の形成は素材が琢撃された後、さらに砥石で縦方向の研磨によって形成されたと推測される。同様に、錫本包楞の匙形器表面凹槽には琢磨による凹坑が非常に一般的である。一方、桑野と錫本包楞の匙形器表面の端部の小斜面には、いずれも使用による摩擦痕跡が認められ、両者の使用方法が一致していることをうかがわせる（図版七）。

現在のところ、桑野と興隆溝—査海文化において玉器工房跡は未発見であり、暫時、両国の玉器製作の過程を全面的に対比する条件は整っていない。ただし、上記のように、玦飾と匙形器の製作プロセスから、いくつかの伝統的な特徴、例えば砂縄切割、轆轤、玦の切目作出、匙形器の凹槽の製作および使用痕等に、類似する技術上の起源関係が明示されている。桑野遺跡の、いくつかの「白色材」による玉器は東アジア大陸に来源する可能性が玉器工芸学において実証できる。

最後に、筆者は、日本玉文化学会会長の藤田富士夫先生が長年にわたり私を教導してくれていることに厚く感謝いたします。さらに、この拙文を書くように促していただき衷心より感謝申し上げます。2019年5月には福井県あわら市教育委員会の温かい歓迎と親切なご指導のおかげで、筆者は桑野遺跡出土の玉器の予備的な観察を行うことが出来ました。この学恩は忘れ難いです。中国では社会科学院の劉国祥先生、黒竜江省文物研究所の李有騫先生およびロシア・アカデミー会員のA.P. Derevianko先生は、常に私に長期的な励ましをくださることを深く心に刻み付けております。

2019.9.12

(和訳：藤田富士夫、協力：錢輝)

# 韓国 玦状耳飾の研究現況と様相

河 仁秀(臨示首都記念館)

## I. はじめに

新石器時代(櫛文土器時代)は、生業形態や生存方式が多様に変化しながら、以前とは異なる新たな文化が創出され展開した時期である。そして、一方において特に身体の装飾が本格的に行われるようになり、頭飾・垂飾・耳飾・腕飾・足飾など、多様な装身具が使用された点から韓国の装身具文化が形成された時期であると言える(河仁秀 2015)。

新石器時代の装身文化の特徴の一つは、旧石器時代には見られなかった耳飾が新たな装身具として出現して流行したという点である。耳飾は身体装飾品として、新たな種類という意味以外に身体を毀損する行為を通して装身がなされた点で、これまでのアクセサリーとは異なる次元の装身具である。このような意味において新石器時代の耳飾は、単に装身文化としてだけではなく当時の人々の精神世界を理解する上で重要な資料となる。

それにもかかわらず新石器時代の耳飾に対する研究は具体的な進展は見られない。これには勿論、関連する資料の絶対的な不足が起因している。最近、玦状耳飾と耳栓に対する新資料が出土してこれに対する研究が発表され、新石器時代の耳飾の輪廓をある程度見えて来るようになってきたが、耳飾の分類と編年、出現と系統、展開等を含む耳飾りが持つ社会的意味と性格については依然として不透明であるというのが実情である。

そこで本稿において櫛文土器社会の耳飾の中で、最近発掘された事例が増加している韓半島の玦状耳飾の研究の現況を見て、その様相について試論を試みるという観点から今後の東アジア玦状耳飾の成立と展開過程を理解するための基礎資料としたい。

## II. 耳飾の種類と分布

韓半島新石器時代の耳飾は玦状耳飾と耳栓の二種類に区分される。玦状耳飾は玉石を丸く加工して耳たぶに穴をあけ掛ける環状形(環形)であり、耳栓は丸い円盤形の土製の装飾品を耳たぶに挿入する型式である。玦状耳飾と耳栓は着装方式や素材に大きな違いがある。耳飾のこのような形の違いには、時期と地域で社会的意味と性格が異なる点もあるが、基本的に耳たぶに穴を開けて身体を装飾するという可視性を持つ点で共通性が見られる。

耳飾は主に玉石や骨、土を素材として製作するが、今日韓半島で発掘された事例を見ると玦状耳飾の場合は玉石を、耳栓は土から製作されている。また、日本縄文文化後・晩期の遺跡からサメの椎骨などの魚骨を加工して耳栓として使用する例も見られる。

韓半島から出土した耳飾はその数は少なく、分布範囲も特定地域に限られている傾向が見られる。後述するように玦状耳飾は13ヶ所の遺跡から14点、土製耳栓は4ヶ所の遺跡から15点ほど今日まで確認され。それが耳飾の総てである。

玦状耳飾は南海岸地域を中心として全国的な分布状況が見られるが、耳栓は東南海岸地域に限られて分布し、内陸や西海岸地域からは確認されていない。耳栓の分布様相は調査遺跡の不足に起因するのと考えられるが、耳栓の主に出土する中期の遺跡は全国的に多数調査されていて、これらの遺跡からは耳栓が出土していないという事実を考慮すれば、内陸と西海岸、東海岸地域では耳栓の着用風習は無かった可能性がある。このような分布の様相を見れば、櫛文土器社会の耳栓は、特定地域に流行した地域性が強い装身具であると見る事が出来る。しかし、未だ調査遺跡は少なく、関連資料が不足しているため、これに対する具体的な解析は今後の研究を待つ以外にない。

韓半島の耳飾は墳墓から出土する一部玦状耳飾を除外して大部分は貝塚や住居遺跡などの遺物包含層から着用者と遊離した状態で確認されているため、着用者と耳飾との相関関係、即ち年齢、性別、着用者の社会的位置とその意味等は不確実である。しかし、韓半島から出土する耳飾の型式や材質、使用時期などは、日本と中国の資料と類似した様相を見せている点から、東アジア新石器時代の装身文化の総合的な理解のために、相互比較研究が必要であると考えられる。

### III. 研究現況

玦状耳飾は土製耳栓に比べて国内外の研究者により多くの関心が持たれ、研究が進められて来た。韓国内の研究として、国立文化財研究所(2004)、林承慶(2012a, 2012b)、金恩瑩(2007)、池榮培(2013)、河仁秀(2013)の論考があり、国外研究者としては中山清隆(1994, 2004, 2009a·b)の研究が代表例である。

この他に日本列島の玦状耳飾の系統と起源の問題で、中国東北地域の玉文化の拡散と伝



図面1. 耳飾の分布図

播という問題と関連して、韓半島の玦状耳飾と玉器とを間接的に取り扱った中国と日本研究者の分析もある(藤田富士夫 2002・2003・2004, 鄧聰, 2004, 劉国祥 2004, 大坪志子 2013, 川崎 保, 2002・2004a, 下村智 2010)。現在の研究動向と今後の研究方向を確認するという視点から最近の研究内容と争点、問題点に対して簡単に紹介して行く事にする。

文岩里遺跡の報告者(2004)朴允貞等は、02-3号墳出土の玦状耳飾の検討を通して文岩里遺跡の出土品は日本縄文文化とは異なり、埋葬の風習と材質、形態的な特徴等は中国東北地域や沿海州地域と類似する点が多いという点から、搬入である可能性が高いと主張した。

しかし、素材の分析の結果軟玉ではなく蠟石である事が判明して、この点を重視すれば搬入品ではなく在地で製作された可能性が高い。

金恩瑩(2007)は東海岸地域高城文岩里遺跡を中心に平底土器を考察して、出土した玦状耳飾の玦口製作方法と製作地の問題を検討した。それによると韓半島の玦状耳飾は日本九州地域とほぼ同じ時期に発生した可能性が高く、玦口の製作に擦切技法という斉一性が認められるため、中山清隆(2004)等が主張しているように縄文文化から伝えられた可能性は低いと主張している。その上で玦状耳飾対する情報や、そのルーツは中国東北地域や沿海州である可能性を認めている。

中山清隆(1994, 2004, 2009a, 2009b)は、いち早く韓半島の玉器に対して関心を持ち、玦状耳飾と玉器文化の系統問題を集中的に検討しているが、その一連の研究は韓半島の玦状耳飾の出現と展開の様相を理解する上で非常に参考となる。

中山の論旨は、韓半島に基本的に玦状耳飾が存在していないという点を前提に文岩里、東三洞、安島、沙村里遺跡の玦状耳飾は、日本列島から搬入されたものと見なしている。<sup>1</sup> その理由として韓半島の玦状耳飾は、その系統を求める中国東北地域と沿海州の資料とは異なり、日本列島出土品と近似して、韓半島で玦状耳飾の製作遺跡が発見されていない点をあげている。

特に文岩里の玦状耳飾は擦切による玦口製作の形態、中央孔の大きさ、全体の仕上げの状態から中国と沿海州のものとは異なり形態的に日本列島出土品と類似しているため、九州地域と交流が活発な嶺南地域を媒介として流入したものと推定している。<sup>2</sup> 日本列島の玦状耳飾の大陸渡來說を多元論的に考える立場から見れば、可能な主張であるとも言える。しかし、日本と韓半島、沿海州等の玦状耳飾文化が、中国東北地域に起源と系統を置くと

---

<sup>1</sup> 川崎 保(2006)は韓半島の玦状耳飾は日本列島から伝わり、縄文前期中葉以降は韓半島を経由して日本列島に伝わったと考えている。

<sup>2</sup> 中山清隆(2009a)は文岩里の玦状耳飾の製作地の問題は製作過程において中間段階の資料が発見されていない限り現地で製作されたものと断定するのは困難であるとして、金恩瑩(2007)が主張する石材と技術があるだけで自生の制作とは見なせないとしている。

いう最近の研究成果と、韓半島から玦状耳飾の出土事例が増加の趨勢、そして高山里遺跡から出土した玦状耳飾の缺口の形態が中国の興隆窪文化段階のものと同じの糸切技法で製作された点を念頭に置けば、寧ろ日本九州地域の玦状耳飾の系譜を韓半島に求めるべきではないだろうか。そして、さらに玦状耳飾を単純に形態的な類似性と量的優位だけで搬入の與否を決定して断定するという考えは再考が必要である。

最初に韓半島の玦状耳飾を総合的に検討した林承慶(2012a, 2012b)は形態的な特徴を通して東三洞、沙村里出土品は日本列島、外縁が整然としていない處容里と船津里、安島出土品は中国長江以南の玦状耳飾との類似性が高く、東海岸地域の文岩里出土品は中国東北や沿海州と関係性が高いと見ている。林承慶の見解は一部日本の研究者と同様に韓半島の玦状耳飾の大部分を外部から流入したとする点に特徴があるが、玉器の材質に対する産地同定が行われていない現状で外形的な形状だけで周辺地域と連結させるのは再考の余地があるだろう。

池榮培(2013)は韓半島の新石器時代装身具の異形遺物の様相と変遷を考察した玦状耳飾の型式分類と編年は論旨の展開と分類等に検討の余地があり、特に玦状耳飾の分類に日本九州地域まで含めたために韓半島の玦状耳飾の特徴と性格は多少曖昧になっている点も否定できない

この他に、前述したように鄧聰、大坪志子、川崎 保、下村智、藤田富士夫は韓半島の玉器を扱いながら特に玦状耳飾問題をそれぞれ検討している。主に中国の玉文化の起源と傳播、或は日本列島の玦状耳飾の系統と受容、傳播ルーツの側面から韓半島の玉器の重要性に論及がある。

以上、韓半島 新石器時代の玦状耳飾に対する最近の研究現況と問題点を簡潔に見てきたが、一部の研究者を除外して主に韓半島の玉文化を検討する中で玦状耳飾の性格と系統文化を断片的に検討しているだけで、具体的で総合的な論議はほとんど実現していないのが実情である。

#### IV. 玦状耳飾の様相と系統

##### 1. 出土遺跡

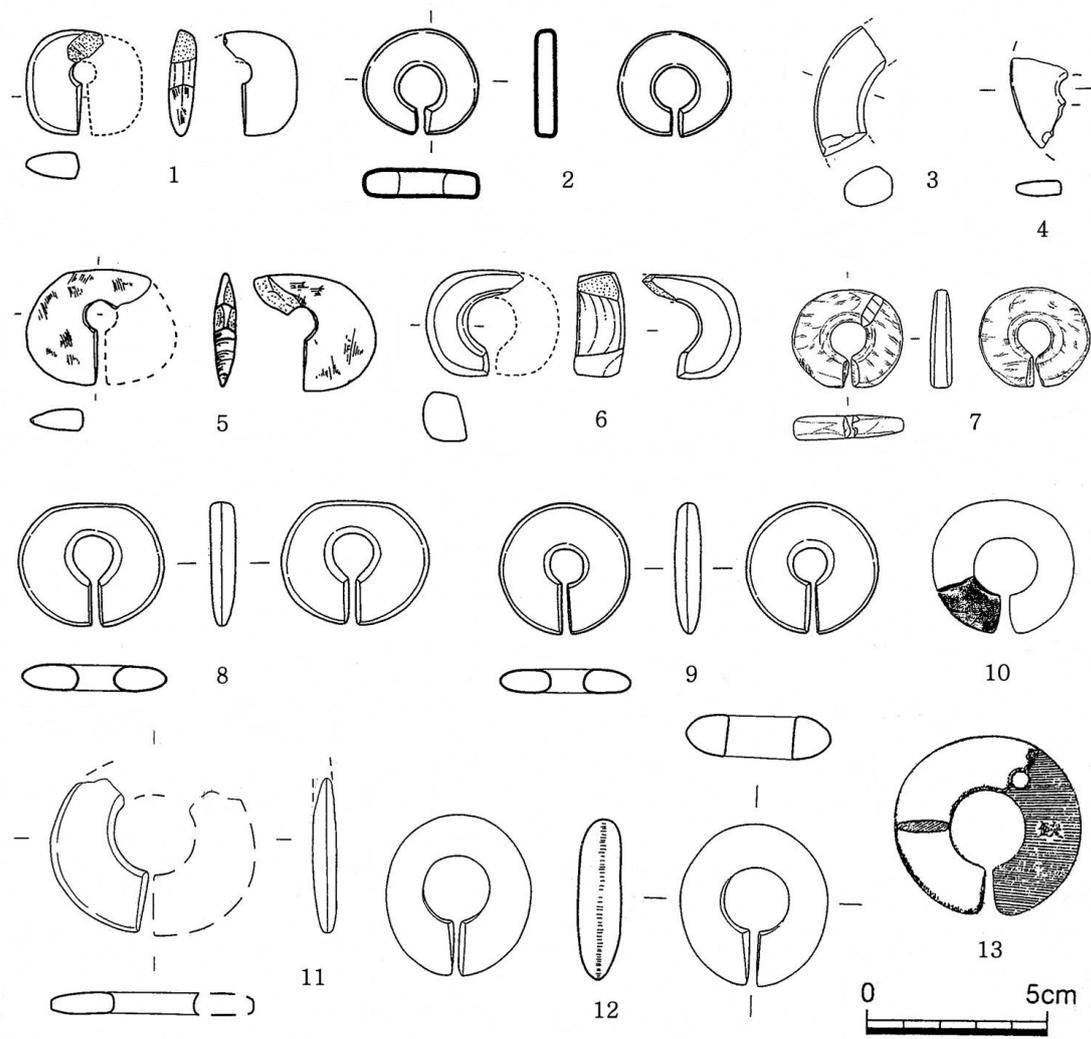
韓半島で最初に確認された玦状耳飾は鳥居龍藏により発見された豆満江下流域の雄基貝塚 出土品であるが、中山清隆(1996)が指摘するように発見事実のみ記述して出土の様相や形態等に対して知る事が出来ない。その後、小野忠明(1935)が平壤附近の寺洞里出土の玦状耳飾を報告したが特に注目される事はなかった。

その後、清道 沙村里遺跡の遺物包含層から蛇紋岩製あるいは軟玉製(?)玦状耳飾が初めて発掘されてから、現在まで調査された玦状耳飾の遺跡は釜山 東三洞、蔚州 新岩里、蔚山 處容里、泗川 船津里、麗水 安島、済州 高山里、道頭洞、三陽洞、龍潭洞、

NO	遺跡	遺構	規格 (cm)				材質	時期
			直徑	厚さ	中央孔	輪幅		
1	東三洞貝塚	4層	2.8×2.6(3.6)	1.3	1.4	0.8~1.2	石英	早期
2	文岩里遺跡	02-3号墓	3.6×3.6	0.65	1	1.2~1.4	蠟石	早期中葉
			3.4×4	0.7	1.2	1~1.4		
3	安島貝塚	1層	2.9×3	0.7	1.4	0.9	?	早期前葉
4	處容里遺跡	Ⅱ-1号墓	2.7×3	0.3~0.9	2	1.1	玉髓	前期 初
5	船津里遺跡	Ⅳ層	4.4×4	1.2	2	1.1~1.5	?	早期後葉
6	沙村里遺跡	包含層	2.9×2(3.2)	0.6	(0.6)	0.9~1.2	軟玉?	早期?
7	高山里遺跡	包含層	3.2×3.7(4.2)	0.58	0.8	0.9~1.5	?	早期
8	三陽洞遺跡	包含層	3.8(5.8)	1	(3)	1.3	?	早期前葉
9	道頭洞遺跡	4号竪穴	2.4×1.2	0.4	?	?	蠟石?	早期後葉
10	龍潭洞遺跡	包含層	?	?	?	?	?	?
11	寺洞里遺跡	包含層	(4.9)	0.4		1.5	?	早期前葉?
12	雄基湾	貝塚	?	?	?	?	?	?
13	新岩里遺跡	包含層	(5.5)	0.7	(2.2)	1.5~1.8	?	早期中葉

<表 1> 玦状耳飾 出土 現況 ※ ( ) 復元法量

,



図面2. 韓国の玦状耳飾

1 : 沙村里, 2 : 安島, 3 : 三陽洞, 4 : 道頭洞, 5 : 高山里, 6 : 東三洞, 7 : 處容里

8 : 9 : 文岩里, 10 : 龍潭洞, 11 : 新岩里, 12 : 船津里, 13 : 寺洞里

清道 沙村里、高城 文岩里遺跡がある〈表 1〉。これらの遺跡から出土した資料は全体で14点に過ぎないが、分布は西海岸地域を除外した全国に見られる(図面1)。寺洞里、文岩里出土品を除外すれば、東南海岸と済州島地域から集中的に出土する傾向が見られる。今後、調査が進行すれば分布範囲は拡大するものと考えている。

韓半島の玦状耳飾は大部分円形で、楕円形乃至、抹角方形も見られる。法量は直径3~4cm程度が一般的である。破片で出土して全体の形状は不確実な済州 三陽洞と平壤寺洞里、蔚州 新岩里の出土品は復元直径が5cm以上と推定されるものがある。様々な大きさの資料が存在していることがわかる。特に5cm以上の大型の玦状耳飾は、日本と中国東北地域の興隆窪(楊虎・劉国祥・鄧聰 2007), 黒龍江地域の小南山遺跡(鄧聰 2004)などから出

土している。材質は具体的な分析が行われておらず不透明な点もあるが、軟玉を含み、玉質の蛇紋岩(?), 石英、蠟石、滑石等がみられ色調は淡緑色、乳白色、淡褐色を帯びている。

## 2. 分類と編年

玦状耳飾は外形的属性により幾つかの型式に区分されているが(川崎 保 2004b, 新東晃一 2008, 藤田富士夫, 2002・2003, 下村智 2010, 池榮培 2013), 韓半島の出土品は数量が少なく分類に困難であるが、平面形態と輪部と中央孔の大きさ、缺口形態、製作技法など細部の属性を総合的に判断して5つの型式に分類した(表 2)。<sup>3</sup>

I型は平面が円形を呈し、中央孔の直径は輪部の幅より大きい型式である。安島、龍潭洞、寺洞里、新岩里、三陽の出土品(図面2-2・3・10・11・13)がこれに属する。日本の玦状耳飾の形式の中では浮輪形、或は環状形(川崎 保 2004b, 藤田富士夫 2003, 新東晃一 2008)に対比される。

II型は平面形態と中央孔の位置等、I型と類似しているが中央孔が輪部の幅より小さいか同じ形状である。文岩里と處容里出土品(図面2-7・8・9)は本類型に属していて、下村智(2010)の分類B類に類似している。

III型は平面方形乃至楕円状を呈し、中央孔は身部上方にある。中央孔の輪部の幅に比べると非常に小さく、缺口が細長いのが特徴である。沙村里と高山里、道頭洞出土品(図面2-1・4・5)が代表的な例である。III型は一般的に日本では縄文前期前葉から中葉以降に流行した型式である事が知られている(川崎 保 2004b, 下村智2010)。このような型式は中国東北地域の白音長汗遺跡からも確認されている(松浦宥一郎 2013)。

IV型は東三洞出土品(図面2-6)が唯一の例であり、本稿では缺口と中央孔の形態を重視して1つの型式として型式分類しておいた。平面形は抹角方形で、輪部が厚い点の特徴である。このよう形態は、指貫型と分類されている。<sup>4</sup>

V型は船津里出土品が唯一の例である。前述したように輪部が厚く輪部外側縁の中央に一定の間隔で微細な刻目を刻み、細部の属性からI~IV型と明確に区別される。このような形態の玦状耳飾は東北アジアで類例を探すことは出来ないものである。形式的に特徴が他の耳飾と区別される点から『船津里型 玦状耳飾』と呼称することにする。V型は中央

---

<sup>3</sup> 以前の論考(河仁秀 2013)では中央孔の位置と大きさ等を基準にして2類型に大別したが、本稿では細部属性を基準として5類型に細分した。

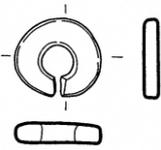
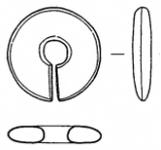
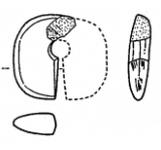
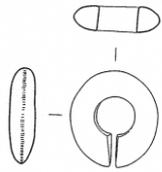
<sup>4</sup> 東三洞出土品は中国東北地域と日本九州地域の指貫形と類似している。指貫形玦状耳飾は興隆窪遺跡118, 142号墓, 興隆溝遺跡22号住居址、査海遺跡(楊虎・劉國祥・鄧聰, 2007)と日本九州地域(下村智 2010)などから出土している。

孔と輪部の関係を見れば I 型としても分類する事が可能である。

I 型は日本九州地域の縄文早期後葉に編年される金環形と型式が類似している点（下村智 2010, 新東晃一 2008）、安島遺跡から日本の轟A式或は苦浜式土器と共伴する様相を示し、新岩里遺跡から出土する細竹型隆起文土器(河仁秀 2012)から判断して、早期でも最も古い段階に属する可能性が高い。寺洞里と三陽洞出土品のような環状形の玦状耳飾(新東晃一 2008, 藤田富士夫 2003)は、日本と中国においては始原期の型式として認識されている点を参考にすれば、I 型の一部の時期は多少遡る可能性もあるだろう。

II 型の文岩里出土品は南海岸の隆起文土器と同時期である鰲山里式土器と共伴している点から一旦、時期を早期中葉と推定して、處容里出土品を遺跡の形成時期を考慮して前期初と見なせるが断定する事はできない。III 型である道頭洞と高山里出土品は遅い型式の隆起文土器と共に出土する点を考えれば、早期後葉段階と推定される。

I 型と II 型の前後関係に対して今後さらなる検討が必要であるが、中国東北地域の玦状耳飾文化の拡散と伝播という観点から、韓半島と日本の玦状耳飾は中国玦状耳飾の影響で出現した(鄧聰, 2004)、周辺地域の玦状耳飾初期型式と類似する点から I 型が先行して II 型が後行すると推定した。

I	II	III	IV	V
				

〈表 2〉. 玦状耳飾 分類表

III・IV型は時期幅を持つ遺物包含層から出土していて時期を確定するのに多少の困難を伴う。I・II型とIII・IV型の関係は時期差を反映しているのか、そうでなければ類型内の変異であるかは、周辺地域との比較研究が必要であるが、出土様相と共伴遺物を見れば I・II型が早く III・IV型は遅い時期であると考えられる。V型の船津里出土品は共伴する隆起文土器の型式(河仁秀 2012)から見て早期の遅い段階あるいは前期初と推定できる。

### 3. 出現期 玦状耳飾と存続時期

玦状耳飾の細部編年は未だ完成されておらず、関連遺跡の数と出土量が絶対的に不足している現況では、どの形式が出現期のものであるかは不明確である。しかし、玦状耳飾の

起源地である興隆窪文化と日本の出現期の型式のものを参考にすれば、韓半島の玦状耳飾の初期型式をある程度は類推する事は可能であると考えられる。

東アジアで最も古式の玦状耳飾は、周知のように糸切技法で製作された缺口と中央孔が輪部幅がより大きい環状型である。環状型を初期出現期の型式であるとするれば、これに類似する形式的属性を持つものが韓半島の出現期の玦状耳飾である可能性が高い。これを前提とすれば、形態は確実ではないが済州 三陽洞、平壤 寺洞里、安島貝塚 出土品が初期型式のものとして想定できる。

特に三陽洞遺跡からは隆起文土器が全く出土しておらず、押捺点烈文土器が中心となる点から三陽洞の玦状耳飾は他の遺跡出土品と時期的に区別され、少なくとも新石器早期の東三洞式土器文化(河仁秀 2014)、即ち、隆起文土器文化より遡る可能性もある。しかし、一方の視点から見れば玦状耳飾は櫛文土器早期文化と密接な関連性を持つ事は明らかである。このため三陽洞出土品はBC. 5, 300~BC. 5, 000年を中心年代とする南海岸の玦状耳飾より早い時期に編年する事は可能であり、紀元前6, 000年前後の年代を持つ起源の地としての興隆窪遺跡の玦状耳飾により形状は近接している点から、三陽洞の玦状耳飾は韓半島で最も早い時期の型式と見る事ができる。

一方、玦状耳飾の中心の時期は関連する遺跡のAMS放射性炭素年代測定値を参考にすれば、早期 中葉頃 (BC. 5, 300~ BC. 5, 000年)と推定される。しかし、早期末か前期初に推定されている船津里と處容里出土品以降、前期と中期の遺跡から全く玦状耳飾が確認されていない点から、少なくとも中期前葉の水佳里 I 式土器段階には消失する事は明らかである。玦状耳飾が前期以後見られないという理由は調査の不足している点もあるが、中期に新たに出現する挿入式 土製耳栓の出現と関連性があると考えている。

韓半島の玦状耳飾の文化的系統は、既に多くの研究者が指摘しているように(鄧聰 2004, 川崎 保, 2006, 藤田富士夫 2002, 大坪志子 2013) 同時期の管玉, 七状垂飾など 玉器助成関係と製作技術、型式的な特徴、年代的な側面から見て現在から8, 000年前に出現した東アジア最古の玉器が出土した中国東北地域の興隆窪文化に求める事ができる。<sup>5</sup>つまり、興隆窪文化の玉器の拡散と、その文化的影響において韓半島で玦状耳飾が出現し、内部での自発的な変容過程を経て、早期の玦状耳飾が成立したものと推定できる。<sup>6</sup>

---

<sup>5</sup> 玦状耳飾の一元論を主張する中国の鄧聰(2004)は、東アジアで最も古式の年代を持つ玦状耳飾と玉器が出土した興隆窪文化 (BC. 6, 200~BC. 5, 600年)を玦状耳飾の起源地と推定して、興隆窪文化の玦状耳飾が中国北方吉林、黒龍江に、南方の長江流域、ロシア、沿海州、韓半島、日本等の地域に拡散したと見ている。

<sup>6</sup> 前述したように林承慶(2012b)と中山清隆(2009a, 2009b)は、韓半島の玦状耳飾を周辺地域(日本、中国 江南、沿海州など)から流入したものと見ているが、搬入品として認定できるだけの型式の同一性、製作技術の共通性、材質の差別性などが証明されていない状態で外部からの流入品であると断定する

韓半島の玦状耳飾は遺跡から出土する限定された数量と素材の稀少性、加工の困難さ等から、社会的に或は集団内で特定の役割と位置を担当した少数の成員が着用が想定され、威信財としての機能(劉国祥 2004, 藤田富士夫 2012, 中山清隆 2009a)も有していたと考えられる。

## V. まとめ

以上。最近発掘資料と研究成果を取りまとめて櫛文土器社会の玦状耳飾の研究の現況と分類、出現時期と系統等に対して概略的に検討を試みたが、資料不足により十分には検討できなかった。耳飾りは新石器時代の装身具の中の1つに過ぎないが、当時の社会の価値観や観念体系、地域間流通と交流関係には、所有者の社会的役割と位置の問題などを把握する事が可能な多様な情報が含まれている。

最近、耳飾に対する研究は系統問題をはじめとして型式分類と編年など新たに検討が加えられ、以前より研究は進められて来ているが、未だ基礎的な研究に留まっている状況にある。櫛文土器社会の装身文化を体系的に理解する事により、当時の社会構造などを把握するためには今後、関連研究が具体的に進められる必要があると考える。

## <参考文献>

### <論文>

金恩瑩2007「高城 文岩里遺跡을 통해 본 新石器時代 平底土器文化의 展開」『文化材』40

国立文化財研究所

大坪志子 2013「玦状耳飾」『季刊考古学』125 雄山閣

藤田富士夫2002「日本列島の玦状耳飾の始原に関する試論」『縄文時代の渡来文化』雄山閣

藤田富士夫2003「環状型玦状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学』大塚初重先生

喜壽記念論文集

藤田富士夫2004「環日本海の玉飾の始原に関する基礎的研究」『環日本海の玉文化の始原と展開』

敬和学園大学人文社会科学研究所

藤田富士夫2012「東アジアにおける玦飾組成について」『茅野市尖石縄文考古館開館10周年記念

論文集』茅野市尖石縄文考古館

鄧聰2004「東アジアの玦飾の起源と拡散」『環日本海の玉文化の始原と展開』

敬和学園大学人文社会科学研究所

鄧聰2006「中国の玉文化」『季刊考古学』94 雄山閣

---

事は出来ない。筆者は玦状耳飾の分布様相と製作技法、在地で求めることが出来る蠟石、石英などの材料の在地性、加工状態などを見ると、中国東北地域から玦状耳飾文化を受容した後に、内部での自発的な変容過程を経て、韓半島で直接製作されたものと見るのが妥当だと考える。

劉国祥2004「興隆窪文化の玉玦および關聯問題の研究」『環日本海の玉文化の始原と展開』  
敬和学園大学人文社会科学研究所

上田耕・廣田晶子2004「南九州の初源期の玦狀耳飾」『環日本海の玉文化の始原と展開』  
敬和学園大学人文社会科学研究所

小野忠明1935「寺洞里附近發見の玦」『ドルメン』4-4岡書院

新東晃一2006「九州の縄文時代の二つの耳飾」『縄文の森から』鹿児島県立埋藏文化財センター  
新東晃一2008「アカホヤ火山灰以前の玦狀耳飾」『岡山理科大学埋藏文化財研究論集』  
岡山理科大学埋藏文化財研究会

楊虎・劉国祥・鄧聰2007『玉器起源探索-興隆窪文化玉器研究及図録』中国考古藝術中心

伊東美奈子2004「玦狀耳飾における着裝法の検討」『環日本海の玉文化の始原と展開』  
敬和学園大學人文社社会科学研究所

林承慶2012a「蔚山 處容里 出土 玦狀耳飾에 대한 考察」『蔚山 處容里 21番地遺跡』  
우리문화재연구원

林承慶2012b「韓半島 出土 玦狀耳飾 小考」『文化財』제45권 4호, 국립문화재연구소

中国社會科學院考古研究所內蒙古工作隊1997「內蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址1992年發掘簡報」『考古』  
第1期

中国社會科學院考古研究所內蒙古工作隊・敖漢旗博物館2004「內蒙古赤峰市興隆溝遺址2002-2003年的  
發掘」『考古』第7期

中山清隆1994「東アジアからみた玦狀耳飾の起源と系譜」『地域相研究』22

中山清隆1996「中国東北地域の先史玉器」『東北アジアの考古学』第二집은샘

中山清隆2004「韓半島出土の玦狀耳飾について」『玉文化』創刊号 日本玉文化研究會

中山清隆2009a「朝鮮 新石器時代の玦とその周辺」『扶桑』青山考古學會

中山清隆2009b「韓国出土の玦とその系譜」『玉文化』6 日本玉文化研究會

池榮培2013「韓半島新石器時代裝身具 및 異形遺物에 대한 研究」釜山大學校考古學科大學院碩士論文

川崎保2002「東アジアの中で見た玦狀耳飾の起源と展開」『長野縣の考古學』II  
長野県埋藏文化財センター

川崎保2004a「玦狀耳飾系統・起源論概観」『環日本海の玉文化の始原と展開』  
敬和學園大學人文社會科學研究所

川崎保2004b「玦狀耳飾」『季刊考古学』89 雄山閣

川崎保2006「中国東北・沿海州から見た縄文玉製品」『東アジアにおける新石器文化と日本』III  
国学院大学

樋口昇一1998「縄文後晩期の土製耳飾り小考」『考古學資料館紀要』14 国學院大學

河仁秀2012「南海岸地域 隆起文土器の編年」『韓国 新石器文化の様相と展開』 中央文化財研究院  
韓国新石器学会

河仁秀2013「新石器時代 玉器の基礎的 検討」『韓国 先史古代の玉文化研究』 福泉博物館

河仁秀2014「東三洞 I 文化層 土器に対する小考」『博物館研究論集』20釜山博物館  
河仁秀2015「儀礼と装身具」『嶺南의 考古學』社会評論  
河仁秀2017『新石器時代 道具論』진인진  
下村智2010「九州出土の玦状耳飾に関する基礎的検討」『先史学·考古学研究V-甲元眞之先生退任記念』  
龍田考古会  
松浦宥一郎2013「中国新石器時代の玦の研究と展望」『玉文化』10日本玉文化研究会

<發掘報告書>

国立文化財研究所2004『高城 文岩里遺跡』  
キム サンミョン1990「清道沙村里遺跡 發掘調査報告」『考古学誌』2 韓国考古民族研究所  
釜山博物館2007『東三洞貝塚浄化地域發掘調査報告書』  
慶南文化財研究院2008『泗川 船津里遺跡』  
国立慶州博物館1991『蔚珍 厚浦里遺跡』  
国立光州博物館2009『安島貝塚』  
国立文化財研究所2004『高城 文岩里遺跡』  
東洋文化財2011『濟州 サムファ地区遺跡』  
釜慶文物研究院2017『蔚州 新岩里遺跡』  
우리文化財研究院2012『蔚山處容里21番地遺跡』  
濟州文化遺産研究院2011『濟州 道頭洞遺跡』  
濟州文化遺産研究院2014『濟州 高山里遺跡』

(和訳：廣瀬 雄一)

## 【紙上発表】

# 北陸地方における出現期の玦状耳飾 —桑野遺跡と大角地遺跡の比較検討—

加藤 学（新潟県埋蔵文化財センター）

## はじめに

桑野遺跡では、早期末葉～前期初頭に位置付けられる「出現期」（藤田 2004）の玦状耳飾が 71 点出土した。しかも、土壌からの出土品が多く、埋葬時の状況や装身具の組成を検討する上で重要な資料となっている。また、「白色材」（木下 2013a）とされた特徴的な石材は類例に乏しく、その出自に関する議論が重ねられてきた。

ここでは、玦状耳飾の消費遺跡である桑野遺跡と、生産遺跡である大角地遺跡を比較することで、北陸地方における出現期の玦状耳飾の様相を明らかにし、桑野遺跡の特異性について考えることとしたい。

## 1. 石材

桑野遺跡における玦状耳飾の石材は、中村由克（2019）の分析により透閃石岩 35 点、滑石 36 点とされた。両者が拮抗する中でも、「白色の透閃石岩」とされた「白色材」は、極めて特徴的な石材である。その類例はいくつかあるとされてきた（木下 2013a）が、色調は共通するものの、異質な石材とされた（中村 2017）。そして、桑野遺跡における白色と明緑灰色の透閃石岩を「日本列島に知られている石材ではなく、海外渡来の石材」とした。そのうえで、中国新石器時代の興隆窪文化との類似性を指摘し、「中国東北部からの直接的な渡来品の可能性」について言及した。

一方、大角地遺跡における玦状耳飾の石材は、在地で産出する滑石のみである。また、新潟県内の玦状耳飾（石材の記載がある 136 点）の 82%が滑石であり、偏重した石材利用であることがわかる。2 番目に多く利用される蛇紋岩（透閃石岩を含む可能性あり）は 8%あるが、前期後半～中期前葉に限定され、後出的な石材利用である（加藤 2010）。

これらの状況を踏まえると、出現期の石材は滑石に偏重するといえ、透閃石岩が普遍的に利用された状況は考えにくい。透閃石岩が半数を占める桑野遺跡の特異性は明らかであり、その背景について検討する必要がある。

## 2. 形態

### （1）大きさ

筆者は、新潟県内の玦状耳飾を集成する過程で、大型（外形 6 cm 以上）・中型（4～5 cm）・小型（2～3 cm）に分類できると考えた（加藤 2010）。桑野遺跡の玦状耳飾の大きさについては、報告書で器長と器幅の相関図が示されており、1.7～6.8 cm まで多様であることがわ

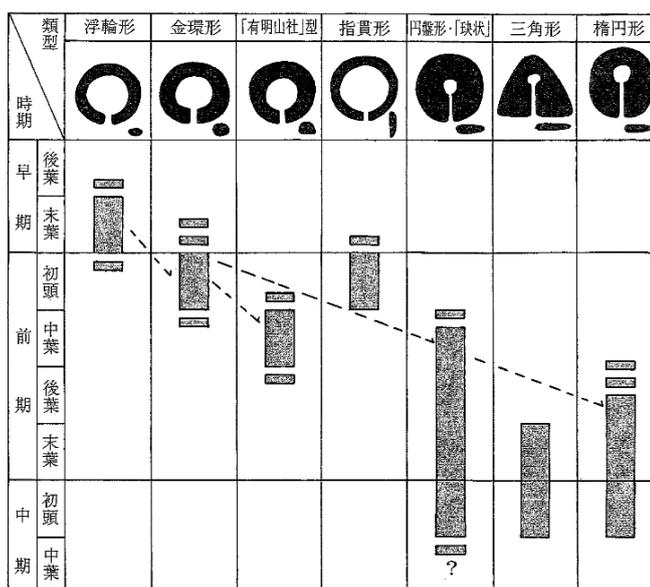
かる。相関図からは、おおむね筆者が示した大型・中型・小型に分類できるとみてよい。厚さは、大きくみると透閃石岩が薄手、滑石が厚手の傾向にあるが、それぞれバラエティーに富む。一方、白色材においては、その他の透閃石岩や滑石と比べると明らかに薄手の傾向にあるといえる。

大角地遺跡の資料は、桑野遺跡と比べると小型が多く、華奢な傾向にある。ただし、第2図に示した資料は、時期を特定した遺構出土品のみを掲載しており、包含層出土資料には大型品も存在する。また、製品の大半が搬出されていることを考慮して、比較する必要がある。

### (2) 形態

川崎保 (2004) による分類 (第1図) と比較すれば、両遺跡とも金環形・浮輪形を主体とする。この2つの形態の組合せからなるあり方は、出現期の特徴といえる。

ただし、桑野遺跡では、透閃石岩で正円に近いものが多く、滑石で横長となる傾向にある。中でも白色材は横長となるものが少なく、正円を基調とすることは明らかである。桑野遺跡と比較される中国・興隆窪文化の査海遺跡では轆轤技術の存在が指摘されており (鄧・李 2019)、硬質の石材から正円に成形された背景をうかがうことができる。



第1図 球状耳飾の形態分類と変遷 (川崎 2004)

このほか桑野遺跡では、「有明山社型」(藤田 1983) に類似するもの(7)と扁平のもの(8)が各1点あるが、より後出的と考えられる形態である。出現期からいくつかの形態が存在することが指摘されている(藤田 2003)が、これらが形態構成に加わることを普遍的な事象として捉えられるのか検討が必要である。一方、このいずれもが白色材であることを踏まえると、一般的な形態変化とは区別して理解する必要があるかもしれない。

大角地遺跡では金環形・浮輪形のほか、指輪のような細く小さな形態(55)や、指貫形が認められる。また、粗い研磨面が残り、面をもつことが特徴的といえる。製作途中の資料であり、当然のことといえるが、桑野遺跡で滑らかに仕上げられていることと対照的である。

### (3) 切れ目

桑野遺跡の切れ目の幅は、総じて狭い傾向にある。切れ目に弧状起伏波紋の痕跡が確認されたことから、糸鋸技法(砂縄切割技術)の存在が指摘されており(鄧・李 2019)、幅が

狭いことと関係するのであろう。剥片石器による擦切技術では、作成が困難な切れ目といえそうである。

大角地遺跡では完形品がほとんどないため比較が難しいが、糸鋸技法を積極的に認めることはできない。その結果として、残されている資料の切れ目の幅が、より広くなるものと推察される。少なくとも、桑野遺跡の切れ目とは区別して考えることができそうである。

### 3. 二次穿孔

桑野遺跡においては、二次穿孔の比率が極めて高い。71 点中 30 点 (42%) に認められるが、石材ごとに見ると滑石は 36 点中 21 点 (58%)、透閃石岩は 35 点中 9 点 (26%) である。二次穿孔は、より破損しやすい滑石で多いといえる。なお、白色材に限ってみると、14 点中 3 点 (21%) であり、透閃石岩の中でもより破損率が低いといえるが、著しい相違ではない。対で認められる大半の穿孔は補修孔と見られるが、明らかに対とならないものもある。切れ目の正反位置に 1 孔が穿たれるもの(23)については、垂飾の一形態と理解したほうがよからう。

大角地遺跡で二次穿孔が認められるのは、7% (43 点中 3 点) に過ぎず対照的である。使用を経ていない資料が多く、二次穿孔は別の製品 (垂飾や勾玉など) へ再加工する過程を示すものと考えられよう。なお、新潟県内における二次穿孔の出現率は 25% (167 点中 48 点) であり (加藤 2010)、これと比べても桑野遺跡では明らかに高率で認められる。ただし、原石産地周辺から離れるほど二次穿孔の出現率が高くなる傾向にあり、桑野遺跡も、そのような大局的な理解の中で位置付けることができよう。

### 4. 装身具の形態構成

桑野遺跡においては、玦状耳飾に加えて管玉 3 点【円柱状 2 点(10・33)、角柱状 1 点(34)】、垂飾 8 点【篋状 5 点(12・13)、鯉節形 1 点(37)、腕輪状 1 点(36)、棒状 1 点(35)】があり、多様な石製装身具が存在する。角柱状の管玉(34)は列点状の文様が刻まれた特徴的なものであり、ほかの垂飾も極めて個性的である。石材は、管玉は滑石 2 点(33・34)と白色の透閃石岩 1 点(10)、垂飾は篋状がすべて透閃石岩で、ほかは滑石である。篋状垂飾は、断面形の中央がくぼむ特徴的なものであり、国内に産地が知られていない明緑灰色 4 点(12・13)と白色 1 点(11)の透閃石岩を素材とする。円柱状の管玉にも白色の透閃石岩(10)があり、外来系の装身具である可能性がある。また、加工に技術と時間を要する「硬質石材」製の管玉は、前期後葉～中期には認められず、白色材の管玉を本格的な出現に大きく先行する事例といえる (浅野 2004)。このような玦状耳飾・管玉・篋状石製品からなる「桑野型装身具セット」(川崎 1996) は、国内では桑野遺跡のみでしか認められず (川崎 2007)、中国東北部やロシア沿海州に起源を求められるという (川崎 2002 等)。

大角地遺跡においては、早期末葉～前期初頭に位置付けられる資料に限れば、玦状耳飾に管玉・垂飾が加わるが少数である。管玉は、円柱状 (59) と角柱状 (60) の 2 点があり、

桑野遺跡と形態構成が似る。ただし、角柱状の管玉と垂飾は小型品であり、桑野遺跡とは異質である。同時期の極楽寺遺跡では、垂飾（48・49）・丸玉（47）・管玉（45・46）・勾玉（50・51）、三引遺跡では垂飾・管玉・璜状石製品（桑野の腕輪状垂飾に対応）が加わることを踏まえれば、本来的には多様な組み合わせが存在すると考えてよからう。石材利用は、滑石に偏重しており、透閃石岩等の硬質石材の積極的な利用は見られない。

## おわりに

桑野遺跡の報告書が刊行されたことで、特異な石製装身具の実態が明らかになった。中村による石材鑑定では、白色と明緑灰色の透閃石岩について、中国産の可能性が指摘された。従来から言われてきた大陸渡來說を、より実証的に論じる資料が得られたことは重要な意味をもつ。ただし、資料の直接的な対比は行われておらず、渡來說に対する慎重な姿勢も併せ持たなくてはならない。

桑野遺跡では、北陸地方で普遍的に利用される軟質の滑石と、利用が認められない硬質の透閃石岩が半数ずつ利用される。藤田富士夫（2003）は、早期末葉には良質石材（特選材）が用いられており、いわゆる「玉」を意識していたと考えている。そして、それが前期初頭になると、滑石などの普通材（在地選択材）の利用へと変化するとした。一方、桑野遺跡では、滑石も多用されており、両者が併用された背景について検討する必要がある。調査担当者の木下哲夫（2013b）は、「石製装身具含有墓壙密集部の遺構分布のうち、白色材・筥状品を包含するのは西半部を主にし、全体の構成とは区別される可能性」を指摘しており、石材間の時期差も視野に、検討することも必要かもしれない。

また、鄧聰・李有騫（2019）は、白色材製等の舶来品を原生模型（ネイティブモデル）とし、滑石製を当地で複製された二次模型（二次モデル）とした。極めて重要な指摘であり、石材間に見られたいくつかの相違は、この2つのモデルのもとで合理的に理解できる可能性が高い。このモデルに大角地遺跡を位置付けるとすれば、二次モデルが在地で更に変容した三次モデルとでもいえようか。少なくとも、ネイティブモデルからの変化は、より大きいと見ておきたい。

このように考えると、桑野遺跡をはじめとする北陸地方の資料には、中国起源の装身具を受容し変容していく過程が示されているのかもしれない。外来系石材と在地石材の詳細な比較検討を行い、共通点と相違点を明らかにし、研究を深化させることが今後の課題である。詳細な分析結果については、稿を改める予定である。

## 引用文献

浅野良治 2004 「縄文管玉」『季刊考古学』89 雄山閣, 31-32 頁

大賀 健 2004 「筥状垂飾」『季刊考古学』89 雄山閣, 37-39 頁

加藤 学 2009a 「北陸地方における縄文時代早期末葉～前期前葉の玦状耳飾—新潟県大角地遺跡の分析から—」『日々の考古学2』六一書房, 53-68 頁

- 加藤 学 2009b 「新潟県大角地遺跡における縄文時代早期末葉～前期前葉の玦状耳飾」『玦状耳飾（玦飾）の製作技術からみた玉文化交流』日本玉文化研究会長野大会実行委員会, 29-39 頁
- 加藤 学 2010 「新潟県における玦状耳飾」『玉文化』7 日本玉文化研究会, 1-31 頁
- 川崎 保 1996 「「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて」『長野県の考古学』財団法人長野県文化財センター, 『縄文玉製品』の起源と流通』所収
- 川崎 保 1998 「玦状耳飾と管玉の出現－縄文時代早期末・前期初頭の石製装身具セットの意義－」『考古学雑誌』83-3 日本考古学会, 1-29 頁
- 川崎 保 2002 「東アジアの中でみた玦状耳飾の起源と展開」『長野県の考古学』財団法人長野県文化財センター, 1-20 頁
- 川崎 保 2004 「玦状耳飾」『季刊考古学』89 雄山閣, 17-20 頁
- 川崎 保 2007 「石製装身具セット」『縄文時代の考古学 6 ものづくり』同成社
- 木下哲夫 2013a 「桑野遺跡出土石製装身具に用いられた白色材－対校正玦状品の形態と出土位置から－」『玉文化』10 日本玉文化研究会, 171-180 頁
- 木下哲夫 2013b 「福井県桑野遺跡出土石製装身具が呈出した諸課題」『縄文装身具の考古学－身体の装飾をどうとらえるか－』早稲田大学先史考古学研究所, 7-22 頁
- 鄧聰・李有騫 2019 「東北アジアからみた桑野遺跡出土の玉玦」『桑野遺跡』あわら市教育委員会, 207-211 頁
- 中村由克 2017 「下鎌田遺跡の石製装身具の石材とその意義」『下仁田自然史博物館研究報告』2
- 中村由克 2019 「遺跡出土の石器・石製品の石材」『桑野遺跡』あわら市教育委員会, 177-191 頁
- 藤田富士夫 1983 「玦状耳飾」『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣, 249-262 頁
- 藤田富士夫 2003 「環状型玦状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会, 39-48 頁
- 藤田富士夫 2004 「玦状耳飾の遺跡と攻玉」『日本玉作大観』吉川弘文館, 309-321 頁

		玦状耳飾	管玉	垂飾
ネイティブモデル	透閃石岩 (中国産?)	<<桑野 (白色)>> 	<<桑野 (白色)>> 	<<桑野 (明緑灰色)>> 籠状垂飾 
	透閃石岩	<<桑野>> 		
二次モデル	滑石	<<桑野>> 		棒状垂飾 腕輪状垂飾 鯨節形垂飾 
	滑石	<<極楽寺>> 		丸玉 勾玉 
三次モデル?	滑石	<<大角地 (早期末葉~前期初頭)>> 未製品 		
	滑石	<<大角地 (前期前葉)>> 		

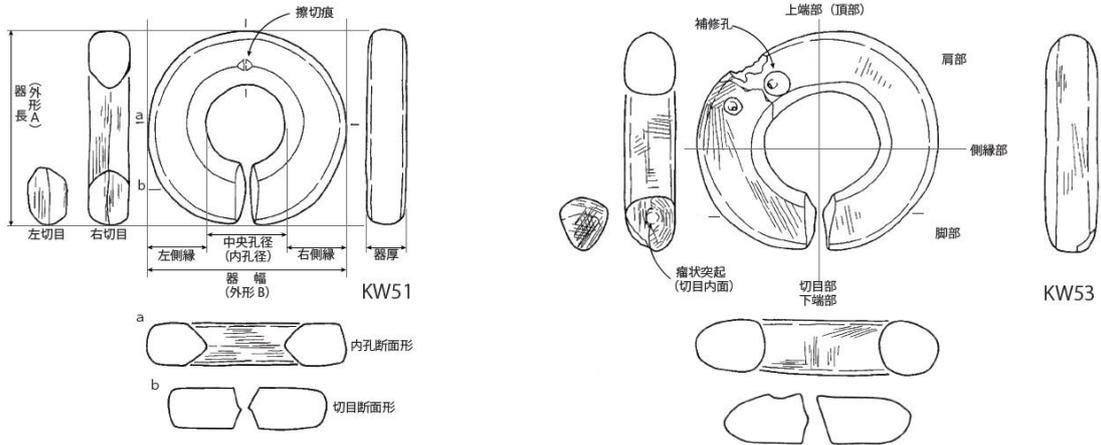
第2図 北陸地方における出現期の玦状耳飾 (S=1:3)

# 桑野遺跡の玦状耳飾について(覚書き)

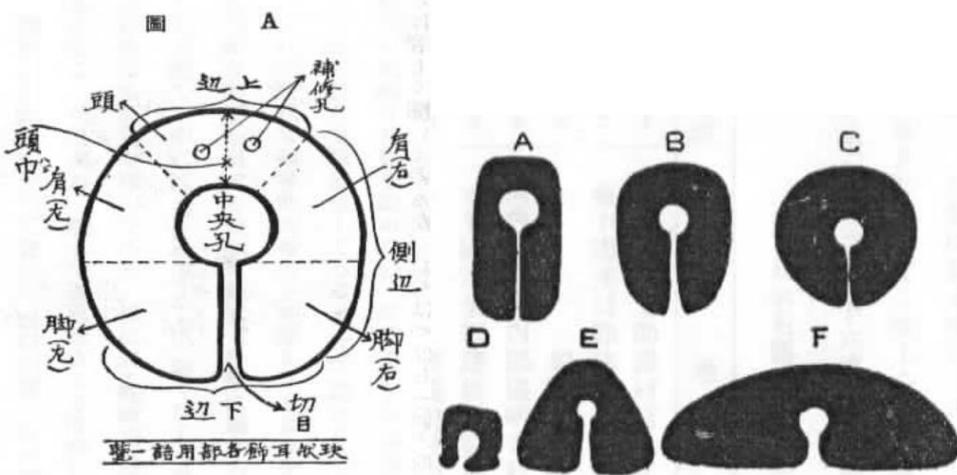
松井 政信 (榊キミコン埋蔵文化財調査室長)

## 1. 玦状耳飾の各部位の名称

桑野遺跡において玦状耳飾は71点が出土した。「玦状耳飾」は近年藤田富士夫氏によって「玦飾」という名称で呼ばれている。この桑野遺跡では「玦状耳飾」の名称とした。桑野遺跡での土壌内での対構成という出土状況や頭部耳位置での出土と考えられ、埋葬時の原位置を保っているものと考えられるため従来通り玦状耳飾の呼称とした。



第1図 玦状耳飾の各部位の名称 (桑野遺跡 2019)



第2図 樋口氏における名称と分類 (樋口 1933)

玦状耳飾は法量を器長、器幅、器厚、重量という名称で記載した。それぞれを一般的には外形 A、外形 B 外形 C とも呼称できよう。基本的に円形・環状の形状に仕上げているが、下端に切目を保有しているため本来の外形としては外形 B が優先されるのかもしれない。玦状耳飾の部位の位置的な呼び方も樋口清之の呼び方を踏襲し、正面図の上から上端部(頂部)、肩部、側縁部、脚部、切目部(下端部)というような記載をした。割目の繋ぐための補修をするために孔を補修孔と呼んだ。

## 2. 玦状耳飾の大きさと形状

玦状耳飾で器長(外形 A)の小さいものから順にならべたものである。外形が小さいと中央孔の大きさも当然小さくなる。そのためか小さいものは川崎保の言う「金環形」,「指貫形」の形状になる。また、外形が大きい場合は中央孔も大きくでき「浮輪形」になると言えよう。

第 3 図は器長での大きさごとに並べたものである。16.5 cm から 67.7 cm までのものがある。報告書では第 63 図に器長と器幅の相関図を掲載した。加藤学氏は大角地遺跡の分析で小形品(外形 2 cm ~ 3 cm)、中形品(外形 4 cm ~ 5 cm)、大型品(外形 6 cm 以上)に分類している。桑野の出土品も加藤氏の分類にあてることが出来るが明確には区分できない。

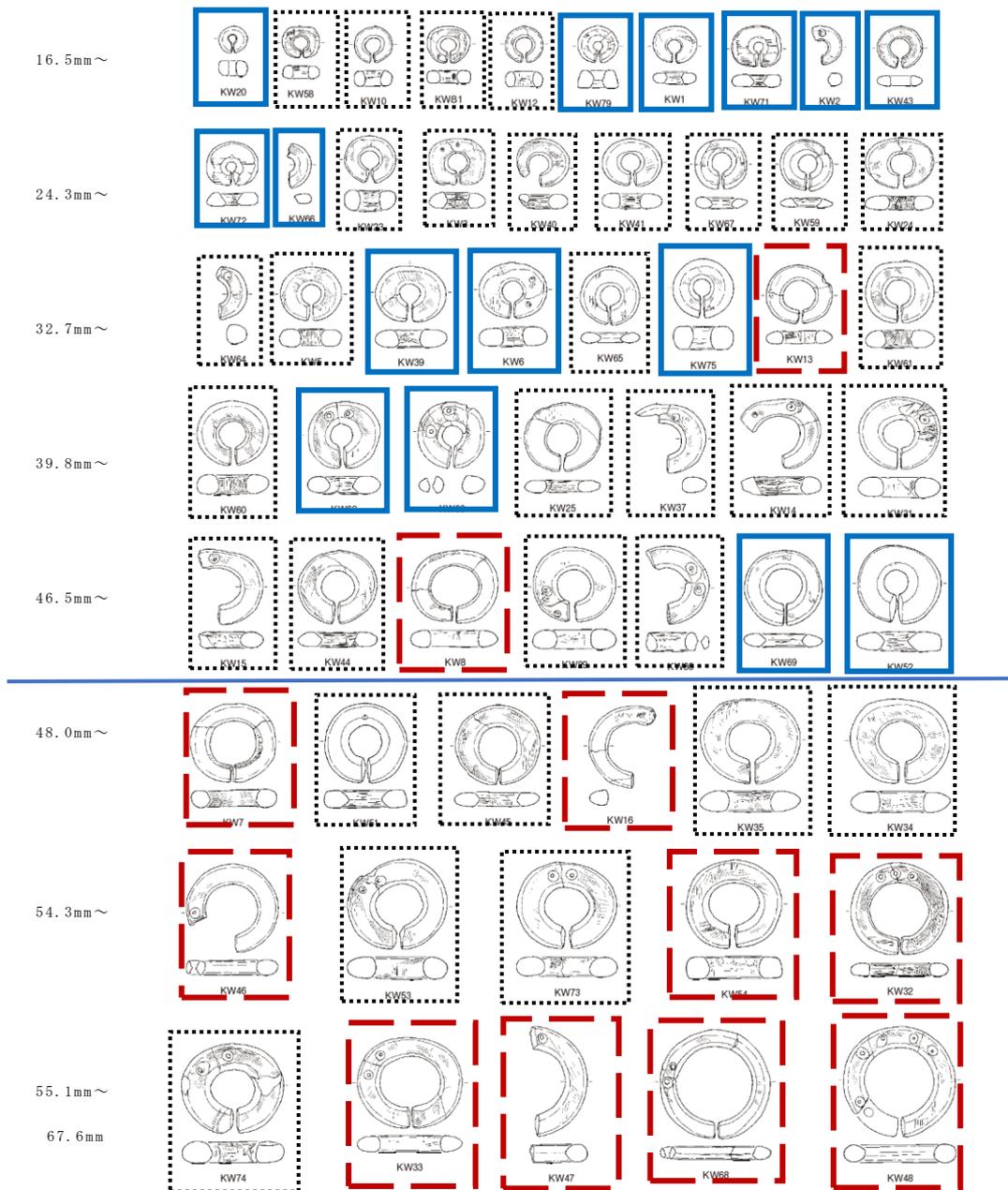
中央孔の比率 = 中央孔 ÷ 器幅 × 100 でみると以下の 3 パターンに分かれよう。

A 型 = 中央孔の比率が 1/3 以下のもの、19.8% ~ 33.2% のもの、15 点、青い枠

B 型 = 中央孔の比率が 1/3 以上 1/2 までのもの、33.3% ~ 49.9% のもの、32 点、  
点線枠

C 型 = 中央孔の比率が 1/2 以上のもの、50.0% ~ 69.4% のもの、11 点、赤い  
破線、浮輪形

第 3 図をみると 48.0mm を境に区別されようか、48mm より小さい方では A 型、B 型がみられ、48mm より大きい方では B 型、C 型がみられる。小形品の中では KW20、79 のように器厚の厚いものや、反対に KW67、59、65 のような器厚の薄いものもみられる。



第 3 図 玦状耳飾の形状と中央孔の比率 (桑野遺跡第 64 図に加筆)

### 3. 内孔断面形について

中央孔または内孔と称される中心から側縁部にかけての横断面を第 4 図に示したように 4 種に区別した。

桑野遺跡の報告書では A 型としたものが B 型とし、B 型としたものを A 型に変更したので、訂正して頂きたい。C 型、D 型はそのままである。

内孔断面形のタイプ

- A 型・・・内孔側の断面形状が横 A 字状をなすもの。
- B 型・・・内孔側の断面形状が B 字状をなすもの。
- C 型・・・内孔側の断面形状が C 字状をなすもの。
- D 型・・・内孔側の断面形状が D 字状をなすもの。



第 4 図 内孔断面形  
(タイプ別)

タイプ	块状耳飾(KW)																小計	%	TR-wh	%
A型	51	52	66	68	69	71	72	79									8点	12	8点	100
B型	1	2	3	59	65	67											6点	9	3点	50
C型	5	6	7	9	10	12	13	14	15	16	17	18	19	22	23	47点	69	1点	2	
	24	25	26	27	28	29	31	33	35	36	37	38	39	40	41					
	44	45	46	47	48	53	54	60	61	62	63	73	74	75	76					
	78	81																		
D型	8	20	32	34	43	58	77									7点	10	1点	14	

第 1 表 内孔断面形のタイプ別一覧表

内孔断面形のタイプ別では第 1 表が示すように C 型が 47 点あり、69 パーセントと大多数を占めている。A 型、B 型、D 型とそれぞれ 10 パーセント前後の割合を占めている。第 1 表の黒地に白抜き数字のものは石質が透閃石岩・白色と桑野遺跡の報告書で中村由克氏が分析されたものである。石質からみると A 型は 100 パーセント TR-wh の白色材が使われている。B 型では TR-wh の白色材が 50 パーセント利用されており、C 型、D 型ではそれぞれ 1 点のみであった。このことは中央孔(内孔)の穿孔と深く関わっているのではと想像する。TR-wh の白色材のものは他の滑石製や透閃石岩とは石の質感が異なり、硬質を感じ、蜜飴状の表面をなしている。このことは切目の擦切部においても同様なことがいえ、中央孔の穿孔過程や切目の擦切過程のそのままでの後の研磨による変形があまりみられないのではと考えられる。つまり中央孔の穿孔に関して石川から新潟での製作地の遺跡での遺物(円環状素材)の在り方から藤田富士夫、加藤学の両氏は抉りによる穿孔方法を考えているが、桑野遺跡の块状耳飾は内孔、外形ともに同心円状のものが多く、なんらかの道具を使った回転方法による穿孔を想像したい。

#### 4. 切目作出について

切目作出は前記したように擦切技法による作出がみられる。切目断面形が「V」または「ハ」の字状になるものである。切目内側中央に縦に稜がみられるものである。また切目に対向する反対側の中央孔内側に擦切痕跡を残すものがある。KW5 表、KW51 表、KW52 表、KW67 表、KW71 表・裏、KW72 表・裏の 8 箇所 6 点の玦状耳飾で観察される。つまりこの 6 点は確実に擦切技法による切目作出をしていることがいえる。こ

のような切目対向擦切痕の類例は新潟県・吉峰遺跡、神奈川県・金程向原遺跡、栃木県・根古谷台遺跡、岐阜県でも 5 遺跡で見られる。

糸切技法については鄧 聰氏が桑野遺跡にも「砂縄切割技術」があることを指摘された。また石川県三引遺跡を整理された小島芳孝氏も三引遺跡の切目が観察できる 27 点の内、大方のものが糸切技法による切目作出をおこなっているとしている。桑野遺跡をみると KW51 の疣状痕跡を残すもの、鄧 聰氏が指摘された KW65 の弧状の痕跡を残すもの、その他切目の間隔の狭いもの、切目の両端が直線的ではなく歪みがあるものなど糸切技法での作出が考えられよう。

#### 5. 最後に

桑野遺跡出土の石製品は玦状耳飾 71 点、篋状垂飾 5 点、棒状垂飾 1 点、鯉節形垂飾 1 点、腕輪状垂飾 1 点、大珠 1 点、管玉 3 点、異形石器 2 点、水晶 1 点、「の」字状石器 1 点が出土しており、時期や出土した場所が異なる大珠 1 点と「の」字状石器 1 点の 2 点は除くべきであろう。また、玦状耳飾だけではなく、その他の製品とのセットとして語られるものである。ここでは力不足で玦状耳飾のみを扱った。仮タイトルでは製作技術についてであったが、あくまで桑野は消費地であって生産地ではないため、製作技術まで迫ることができなかった。また、桑野遺跡の特徴としてほとんどのものが丘陵上の遺跡の中央部と考えられ、縄文早前期の集落の中心に土壙群があったと思われ、東西南北 15m 前後の集中している。それを囲んで環状に住居が廻っていたのだろうと想像する。周辺にあったと思われる住居は縄文時代中期までには流され、丘陵中央のわずかな土壙群のみが運よく残されたのであろう。また丘陵下の低い所にあった斜面貝塚(北貝塚、北東貝塚)が埋もれながら遺されたのであろう。

石製品についてはその出土状況やセット関係を含め、大陸との関連性など総合的に分析されるべきである。ここでは玦状耳飾の一部の覚書きとしてまとめにしたい。

(引用参考文献は紙面の都合上割愛させて頂きました)

## 桑野遺跡の石製装身具の石材

中村 由克（下仁田町自然史館／明治大学黒耀石研究センター）

### 1. はじめに

桑野遺跡は、1992年の発掘以降、多数の優美な石製装身具があり、他では例を見ない「白色材」が出土したことで注目を集めた（木下 2013）。筆者は 2016 年、調査者の木下氏のご配慮で出土品の全点を実見し、報告書執筆の機会を与えていただいた。報告書の作成にあたっては、2018 年に出土品全点（非掲載資料を含めて 988 点）の石材鑑定を行なった。鑑定にあたっては、実体双眼顕微鏡による主として 20～100 倍の非破壊の観察が中心であり、帯磁率、光沢度測定などを併用した。

### 2. 石製装身具の石材構成

重要文化財となっている石製品 83 点の石材は、透閃石岩と思われるもの 42 点と滑石 41 点である。透閃石岩と思われるものは、その色調により白色 (TR-wh) 17 点、明褐色 (TR-l.br) 6 点、褐色 (TR-br) 2 点、緑灰色 (TR-gre) 11 点、暗オリーブ色 (TR-gre) 2 点、明緑灰色 (TR-l.gre) 4 点に分けられる。  
**透閃石岩・白色 TR-wh:** やや黄色味を帯びた灰白色 (5Y8/1.5) で、ち密細粒で堅固な外観をした石材である。1～2 mm ほどの含有物が斑点状に多く含まれる。研磨された面には樹脂状光沢がみられ、本遺跡ではもっとも光沢が強い。帯磁率、磁石テストともに磁性は極めて弱い。

- ・KW52、KW51、KW59、KW68、KW80 などには、長さ 1～1.5 mm ほどの両端がとがった透明な針状結晶が含まれる。
- ・KW65、KW67、KW51、KW71、KW20 などには、透明な針状結晶が集合した結晶が含まれる。形状からは、透閃石と推定される。これらの石材の基質の部分は、乳白色で極細粒である。
- ・KW69 は透明部のなかに極細粒の乳白色部が雲状に浮かぶように存在する。雲状の組織は、液体から固化してできる岩石鉱物にたまにみられるものである。

**透閃石岩・明褐色 TR-l.br:** 灰オリーブ色 (5Y6/2) で、ち密細粒で堅固な外観をした石材である。KW1 はやや明るく、KW10 はやや暗い色調である。KW1、KW41 は鏡下ではやや粗い印象。

**透閃石岩・灰褐色 TR-br:** 灰褐色で暗色部と明色部が入り混じった外観をしており、ち密細粒で堅固な外観をした石材である。

**透閃石岩・緑灰色 TR-gre:** オリーブ灰色 (10Y6/2) で、ち密細粒で、やや透明感を持つ外観をした石材である。帯磁率、磁石テストともに磁性は極めて弱い。KW7 はやや色調が暗く、帯磁率は  $26 \times 10^{-5}$  SI 少し高い。KW46、KW47、KW44、KW7 には鉄鉱物と思われる黒色の鉱物を含む。KW44 以外のものは、濃い色調で、外観がやや粗い感じを受ける。

**透閃石岩・暗オリーブ色 TR-gre:** 緑色がかった灰色 (7.5Y6/1) で、緑灰色タイプよりやや薄い色調である。ち密細粒で、やや透明感を持つ外観をした石材である。緑灰色タイプより少し光沢が強い。帯磁率、磁石テストともに磁性は極めて弱い。

**透閃石岩・明緑灰色 TR-l.gre:** 緑色がかった灰白色～淡黄色 (2.5GY8/1) で、ち密細粒で堅固な外観をした石材である。灰白色部と暗色部が入り混じった外観を示す。研磨された面には樹脂状光沢がみられる。帯磁率、磁石テストともに磁性は極めて弱い。

**滑石・褐色 TA-br :** 濃い褐色（オリーブ褐色 2.5Y4/3）で、滑らかな研磨面を有する。弱い樹脂状光沢をもつ。鏡下で細かい線状痕が多くみられるのは、硬度が小さい滑石の特徴である。帯磁率、磁石テストともに磁性は極めて弱い。

**滑石・緑褐色 TA-gre :** 滑石・褐色よりも暗い色調で、滑らかな研磨面を有する。樹脂状光沢をもつ。鏡下で細かい線状痕が多くみられるのは、硬度が小さい滑石の特徴である。帯磁率、磁石テストともに磁性は極めて弱い。

### 3. 白色石材の検討

これらの中で、問題が大きいのは「透閃石岩・白色 (TR-wh)」と「透閃石岩・明緑灰色 (TR-l.gre)」とした石材である。「白色材」については、木下 (2013) が、群馬県下鎌田遺跡、埼玉県打越遺跡、栃木県根古谷遺跡などを類例として指摘している。下鎌田遺跡の玢状耳飾は、実体顕微鏡観察と比重 (2.57) のデータから白色玉髓であり、新潟県北部産の石材と判定された (中村 2017c)。後者の 2 遺跡は未検討である。白色を呈する玢状耳飾の石材としては、ほかに平岡遺跡の透閃石岩 D2 (TR-D2) と小竹貝塚と三内丸山遺跡で記載した方解石がある (中村 2014、2015、2017a) (注 1)。その後、福井県鳥浜貝塚の玢状耳飾を調査したところ、実見できた玢状耳飾 15 点中、方解石 12 点、滑石 3 点、透閃石岩 B 1 点と、白色のものはすべて方解石であることが判明した (未公表)。

桑野遺跡の白色石材は、上述の国内他遺跡の白色石材とは少し質感等が異なっている。KW65、KW67 の透明含有物の外観は、下鎌田遺跡の白色玉髓に似ている点があるが、悩ましいところである。KW69 の透明部に白色部が雲状に浮かぶ質感は、中国産と思われる透閃石岩 (TR-A1) 製の玢状耳飾 (注 2) で確認でき、KW69 は透閃石岩と判断される。このほか、KW52、KW51、KW80 などにみられる針状結晶の入り具合等は透閃石とみられるが、このような質感の透閃石岩はこれまでに国内の旧石器時代、縄文時代の石斧や装身具石材では、みたことがないものである。このような不十分ではあるがこれまでの観察結果から、桑野遺跡の白色石材は透閃石岩であり、TR-D2 タイプ (注 3) に類似すると判断した。ただし、透閃石岩の判断基準の一番決め手となるのは、比重が大きいことと鉱物判定で透閃石、アクチノ閃石が検出されることなので、この確定は今後に残される。

「透閃石岩・明緑灰色 (TR-l.gre)」も国内の他遺跡資料では見られなかった質感の石材である。実体顕微鏡による観察 (写真図版・写真 51~62) は、ほぼ間違いなく透閃石岩の特徴が確認できる。したがって、「透閃石岩・明緑灰色」は透閃石岩でいいと思われるが、これも、従来、国内で確認できていない石材と推定される。

### 4. 白色石材の意味

桑野遺跡の玢状耳飾に関して、藤田 (2013) は「中国東北部の興隆窪文化に来源する」と指摘している。興隆窪遺跡の「玉玢」は真玉製 (いわゆる軟玉製) であると紹介されている (藤田 2004)。興隆窪遺跡の「玉玢」の石材は、楊ほか (2007) の写真で見ると多くは明緑灰色で透明感があるものと、白色で透明感が強いものの 2 種類であるが、229 号出土品 (P92・P93)、250 号出土品 (P144) などは、乳白色で透明感がなく、小さな含有物が含まれる石材の質感は桑野遺跡の「透閃石岩・白色」によく似ている。白色を呈する石材の中で、写真比較ではあるが、最も類似したものと思われる。また、同じく白色・透明品の 108 号出土品 (P106・107) には、KW69 にみられる雲状の模様が観察できる。

以上の国内遺物との比較と文献での検討から、桑野遺跡の「透閃石岩・白色」と「透閃石岩・明緑灰色」は、日本列島に知られている石材ではなく、海外渡来の石材と考えられる。今のところ、現物にあたっては、多くの文献を見た訳でもないが、中国新石器時代の興隆窪遺跡（内蒙古赤峰市敖漢旗宝国吐郷・興隆窪村）の出土品との類似性が大きく、中国東北部からの直接的な渡来品の可能性を考えた。なお、ほかの石材にも渡来品があるかどうかは、十分に検討できなかった。

縄文時代早期末・前期初頭と想定される桑野遺跡の塊状耳飾石材が中国由来であるとする、次のような仮説が立てられる。日本列島最初の塊状耳飾として白色材が用いられ、縄文時代前期に日本海沿岸地方を中心に国内産の白色玉髓（下鎌田）、方解石（小竹貝塚・鳥浜貝塚・三内丸山遺跡）、透閃石岩（平岡遺跡）などの白色の石材が利用され、それとともに国内産の白色以外の透閃石岩や滑石が使用されるようになったと考えられる。

## 5. あとがきと注

桑野遺跡の装身具石材については比重を測ることができなかったことなどから、十分な検討ができず心残りである。他遺跡では見えない色調、質感の石材であり、十分な石材の判定基準がなかったため、これらの追求は残された課題である。また、文献上で比較できた中国の石材を実見した訳ではないので、この点もこれからの課題である。

注1 中村（2014、2017a）では、分析走査型電子顕微鏡による判定で  $\text{CaCO}_3$  と判定され、「霰石か方解石」としていた。その後、信州大学牧野州明教授のX線解析分析で方解石と確定した。

注2 須藤隆司氏所有の出土地・時代不明の塊状耳飾、海外のものとする。

注3 透閃石岩 D2 (TR-D2) は、当初、「緑泥石岩」と判定されていた。その後、飯塚義之氏と宮島 宏氏による分析で、透閃石岩の一種であることが判明した。実体顕微鏡レベルでは結晶形が見分けられない。比重は透閃石岩本来の2.9～3.0程度のももあるが、なかには2.70(日向林 B No34)、2.73(長野県日向林 B No25、No59)、2.78(秋田県地蔵田)など、比較的比重が高くないものもある。このように比重値に幅がみられる現象は、本来の透閃石、アクチノ閃石だけでなく、それ以外の比重の軽い鉱物も一緒に含まれていることを意味していると思われる。質感は透閃石岩であるが、成分は純粹ではないことが予想される。この点では、「ロジン岩」とされるものもこのタイプであると予想される。

## 文献

木下哲夫 2013 「桑野遺跡出土石製装身具に用いられた白色材 - 対構成塊状品の形態と出土位置から -」『玉文化』10、171-180.

中村由克 2014 「石材とその原産地の推定」『小竹貝塚発掘報告書（第2分冊）』富山県文化振興財団、43-70.

中村由克 2015 「石材とその原産地推定」『平岡遺跡発掘報告書』富山県文化振興財団、277-296.

中村由克 2017a 「北陸系石材の三内丸山遺跡への波及の研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』20、52-63.

中村由克 2017c 「下鎌田遺跡の石製装身具の石材とその意義」『下仁田町自然史館研究報告』2、27-32、口絵2.

藤田富士夫編 2004 「環日本海の玉文化の始源と展開」敬和学園大学人文社会科学研究所

藤田富士夫 2013 「石製装身具総論（始源期） - 塊状耳飾研究の現在 -」『公開シンポジウム 縄文時代装身具の考古学・身体装飾をどうとらえるか』早稲田大学先史考古学研究所、69-74.

楊 虎・劉國祥・鄧 聰 2007 「玉器起源探索・興隆窪文化玉器研究及圖録」中国考古芸術研究中心 香港中文大学 323P.

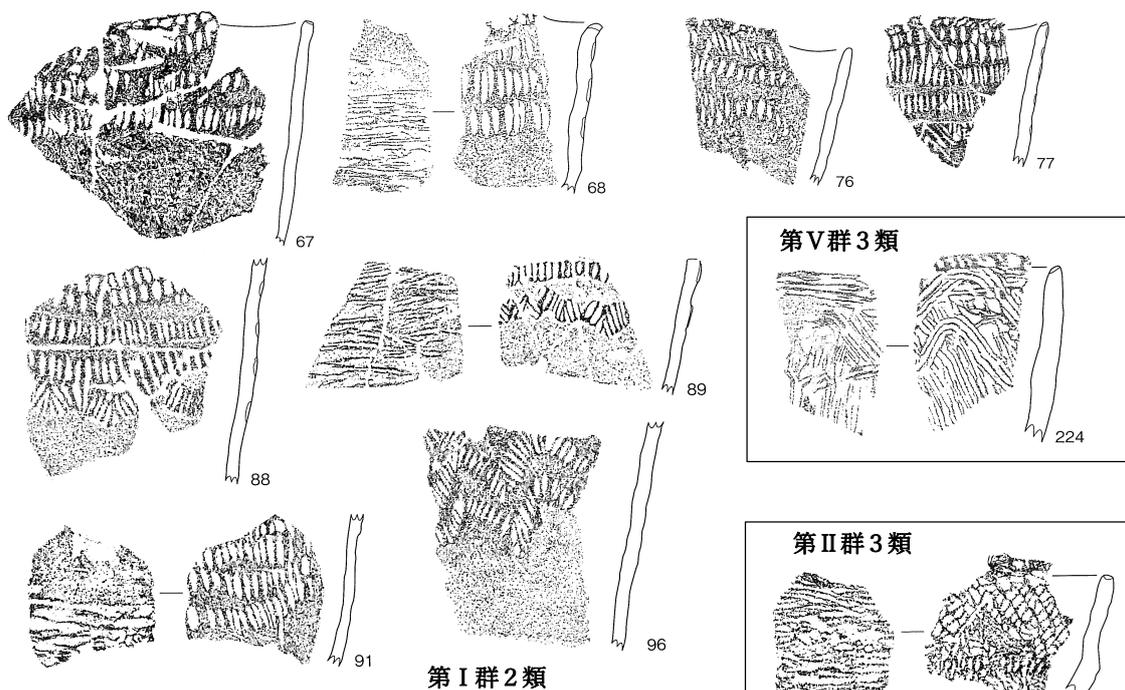
### 1 桑野遺跡出土の他地域の諸型式土器

桑野遺跡を象徴する玦状耳飾りや石製品に関わる早期から前期初頭の土器は、遺構に伴う事例は皆無で、そのほとんどが丘陵の北西側から北側にかかる北斜面および丘陵北東斜面の貝層下からであった。これらの土器を分析した結果、東海地域の諸型式に類似する土器が色濃く出土していることが明らかとなった。

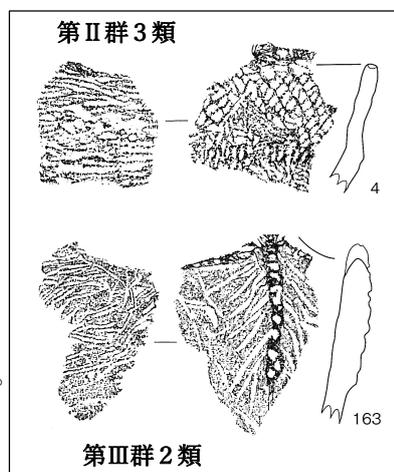
それは、第Ⅰ群Ⅰ類にある37・38は、盃状となる特徴的な波頂部形状や口縁下の爪形刺突から粕畑式に類似する土器と考えられ、他にも同様な爪形刺突を施す土器を第Ⅰ群の



中に見出せる。また、第Ⅰ群Ⅱ類とした大多数の土器は、粕畑式に後続する上ノ山式、入海式、石山式に類似する土器で、むしろ入海Ⅱ式・石山式に比定される土器が主体を占めている。さらに、第Ⅴ群Ⅲ類に含めた224は、横位波状の条痕で天神山式に類似する。



一方、東海地域以外にも、関東と関わりのある土器も僅かながら散見できる。第Ⅱ群Ⅲ類とした4の口縁下の僅かな屈曲は茅山上層式の器形に近似し、第Ⅲ群Ⅰ・Ⅱ類に含めた6や163も茅山上層式に類似する土器の可能性をもつ。さらに、第Ⅳ群とした土器は、口縁下に撚糸側面圧痕で文様を描く前期初頭の花積下層Ⅰ式に並行する。

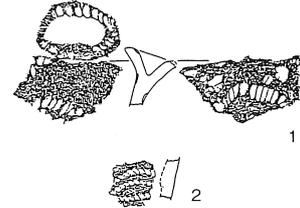


## 2 周辺地域における他地域の土器群

早期末葉から前期初頭の遺跡として、福井県内では福井市北堀貝塚、小浜市鳥浜貝塚、勝山市古宮遺跡が挙げられ、石川県では加賀市柴山潟底縄文貝塚、小松市六橋遺跡、七尾市佐波遺跡、同市吉田野寺遺跡、同市三引遺跡、穴水町甲・小寺遺跡、鳥屋町春木縄文遺跡など、富山県では上市町極楽寺遺跡、射水市南太閤山Ⅰ遺跡、氷見市上久津呂中屋遺跡などの各遺跡が知られている。ここでは、桑野遺跡と同様な土器を出土させた遺跡で確認してみたい。

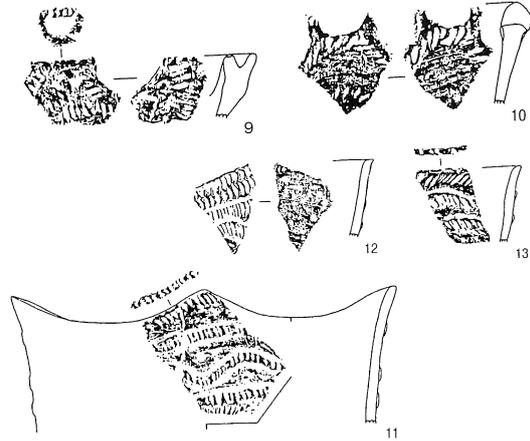
### 福井市北堀貝塚

早期末から前期中葉までの土器が出土しているが、他地域の土器は少ない。早期末の土器としては、1の波頂部が盃状となり口縁下の表裏面に爪状ないしへら状の刺突列を施す粕畑式類似土器がある。前期初頭には、2の口縁部文様に撚糸側面圧痕で弧状等の文様を施す花積下層Ⅰ式並行の土器が含まれている。



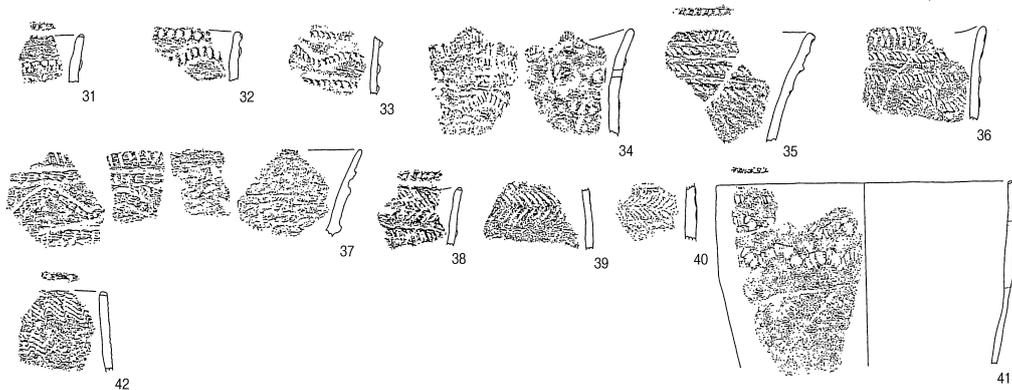
### 加賀市柴山潟底縄文貝塚

早期末を主とし、僅かに前期前葉と思われる土器が出土している。他地域の土器には、9・10の波頂部が盃状ないし双角状となり、口縁下の表裏面に爪状ないしへら状の刺突列を施す粕畑式に類似の土器。また、11～13の口唇部への刻みや、口縁部文様としての波状等の低い隆帯貼付および隆帯上への爪形刺突を施した入海式に類似の土器が確認できる。



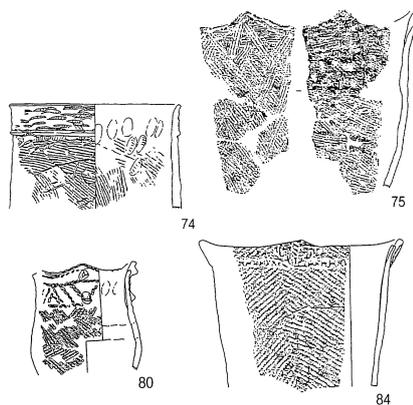
### 小松市六橋遺跡

早期および前期末葉から晩期の遺跡で、早期末の土器に31の口縁下に上下の刻みをもつ隆帯をもつ上ノ山式類似土器。32～38の口縁下に直線的な横位隆帯や波状隆帯を巡らせ、隆帯上に爪状ないしへら状の刻み、あるいは隆帯下端に斜位爪形刺突を巡らせる入海式類似土器。39・40の爪形刺突を横位ハ字状に巡らせる入海式ないし石山式類似土器。41の口縁下に爪状刺突ないしへら状の刻みを横位や波状に施す石山式類似土器。さらに、42の口縁下に横位波状となる条痕を施した天神山式土器がある。粕畑式類似の土器はみられない。



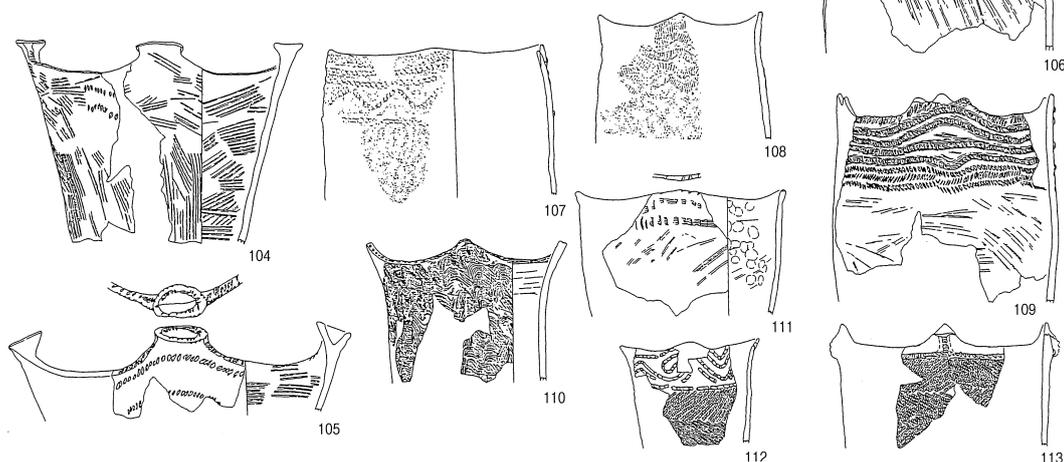
### 七尾市三引遺跡

三引遺跡の下層は早期末から前期初頭を主とした時期で、出土した土器量も圧倒的に多い。しかし、その中には粕畑式や上ノ山式・入海式に類似する土器はみられず、縦位波状の条痕が施される土器や、貝殻腹縁による横位押圧刺突の土器、そして縄文や条痕施文の土器が多く出土している点が特徴的である。しかしながら、その中であって早期末に位置づけられる天神山式や74・75の神ノ木台式に共通する文様を施す土器、木島Ⅱ式土器があり、前期初頭としては木島Ⅲ式、84の塚田式、撚糸側面圧痕を施した80の花積下層式や下吉井式に類似の土器の存在が確認できる。



### 氷見市上久津呂中屋遺跡

早期末から前期前葉、中期中葉から中期後葉の膨大な量の遺物を出土させた遺跡である。早期末から前期初頭の他地域からの土器には、104・105は波頂部が特徴的な形状をなし、口縁下に爪状ないしへら状の刺突列を施す粕畑式に類似する土器。106～109の口縁下に直線的な横位隆帯や波状隆帯を巡らせ、隆帯上に爪状ないしへら状による刻み、あるいは隆帯の下端に斜位ないし横位ハ字状の爪形刺突を施した入海式に類似の土器。110の口縁下に横位の波状となる条痕を施した天神山式に類似の土器。そして前期初頭の土器として、112の下吉井式に類似した土器、113の塚田式土器を確認することができる。



以上、各遺跡における若干の時間差および出土量の差はあるが、早期末から前期初頭期にはある程度の量の遠隔地の土器が確認できた。とりわけ、早期末の土器では、口縁形態の特徴的な粕畑式をはじめ、上ノ山式、入海式、石山式、そして天神山式といった、東海地域での諸型式土器が色濃く確認できる。また、前期初頭期では、木島Ⅲ式をはじめ、塚田式、下吉井式、そして花積下層Ⅰ式並行の土器といった各地域の土器が確認できる。

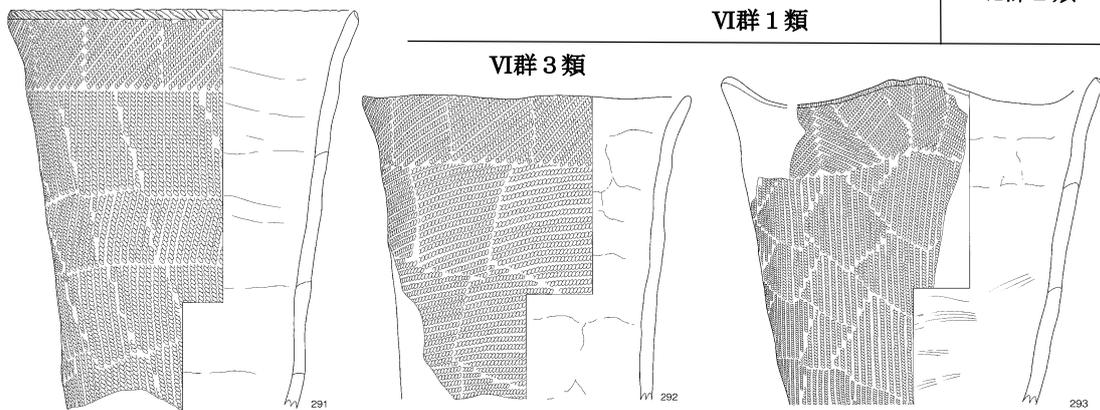
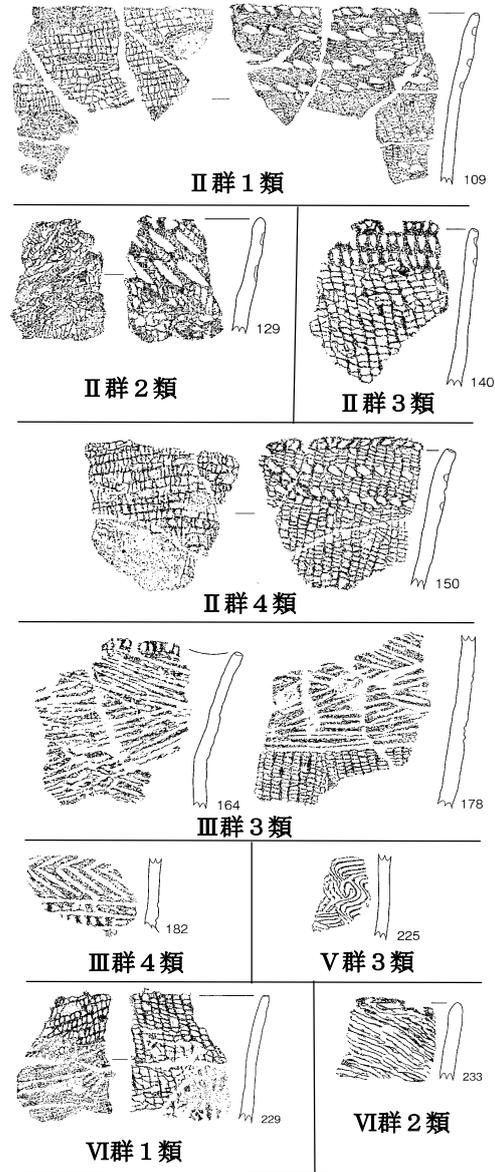
# 北陸域における在地土器

谷藤保彦

## 1. 桑野遺跡における在地土器とは

報告書でも記しているが、各群類に分別した土器について触れてみる。

第Ⅰ群土器は爪形文により文様を描く土器群とし、口縁下に爪形文で文様を描く土器を1類、口縁下に連続する爪形文で横位および鋸歯状の文様を描く土器を2類。第Ⅱ群土器は口縁下に刺突を巡らせる土器群とし、口縁下に横位刺突を巡らせる1類、口縁下に斜位刺突を巡らせる2類、口縁下に縦位刺突を巡らせる3類、口縁下に点列状刺突を巡らせる4類。第Ⅲ群土器は口縁下に沈線で文様を描く土器群とし、口縁下に沈線を巡らせる1類、波頂下に垂下隆帯および斜行沈線を施す2類、口縁下に沈線で菱状の文様を描く3類、口縁下に横位ハ字状（矢羽根状）の沈線を巡らせる4類。さらに、口縁下に撚糸側面圧痕で文様を描く土器群を第Ⅳ群土器。第Ⅴ群土器には口縁下に条痕を施す土器群を当て、条痕の施文方向や施文方法から1～3類に分別した。第Ⅵ群土器は出土量の最も多い口縁下に縄文を施す土器群で、縄文の施文方向・方法から1～4類に分別。第Ⅶ群土器は無文土器。そして、これら第Ⅰ～Ⅶ群に関わるであろう底部を第Ⅷ群土器として記述した。



これらの土器にあって、第Ⅰ群とした大方の土器は東海地域で早期末とされる粕川式以降の諸土器型式に類似し、中でも入海Ⅱ式・石山式が量的に主体をなし、他にも関東の茅山上層式類似土器や天神山式類似土器、前期初頭となる花積下層Ⅰ式並行土器も極少量確認されている。また、出土量比からしても、入海Ⅱ式と石山式に比定される土器の段階が桑野遺跡の主体時期を示している。その一方で、他地域の土器群と共に多くの縄文施文土器が出土している。器面に施文される縄文の施文方向・方法から第Ⅵ群1～4類とした縄文施文土器をベースに、刺突による文様を描く第Ⅱ群1～4類、沈線で文様を描く第Ⅲ群3・4類が、在地要素の強い土器ということとなる。所謂、非縄文施文の外来系土器群と対峙させて扱われてきた縄文施文土器群である。こうした状況は、北陸地域一帯にもみられる。

## 2. 北陸地域における在地土器

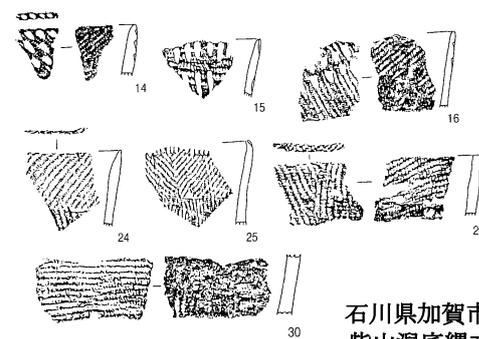
まず、桑野遺跡第Ⅱ群とした横位刺突の土器は、石川県三引遺跡や富山県上久津呂中屋敷遺跡にもみることができ、斜位刺突の土器は石川県柴山潟底縄文貝塚、六橋遺跡、三引遺跡に、縦位刺突の土器は福井県北堀貝塚、六橋遺跡、三引遺跡に、点列状刺突を巡らせる土器は三引遺跡でも確認できる。しかし、六橋遺跡の48のような横位ハ字状（矢羽根状）の刺突文様を巡らせる土器は、桑野遺跡では確認されていない。

次に、第Ⅲ群3類の沈線で文様を描く土器は、桑野遺跡以外では上久津呂中屋敷遺跡に90の1点だけ確認できる。第Ⅲ群4類とした土器は、前期初頭に位置づけられる極楽寺式に特有な文様であるが、その文様の成因については再考する必要があるだろう。それは、横位ハ字状刺突からの直接的な系統上にあるのか、横位ハ字状刺突自体の成因は何か。施文工具の違いによる時間的な差異の有無等々……。

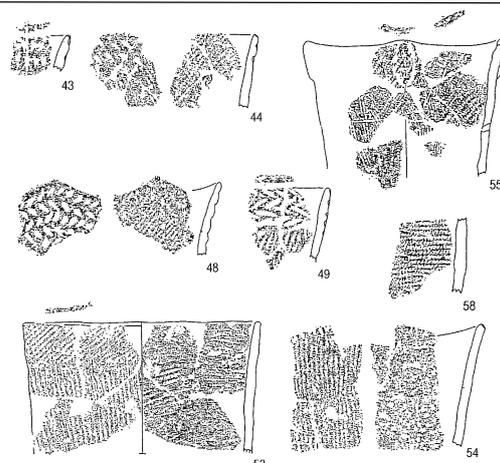
さらに、縄文施文土器のベースたる第Ⅵ群土器では、その施文方向や施文方法から縦走ないし縦走ぎみな縄文、斜行縄文、横走縄文、そして口縁下と胴部で原体の回転方向を変え、ことにより条の走行方向を変えた縄文、加えて羽状縄文等、各種の縄文を施文した土器が多く、その量も少なくない。



福井県福井市北堀貝塚



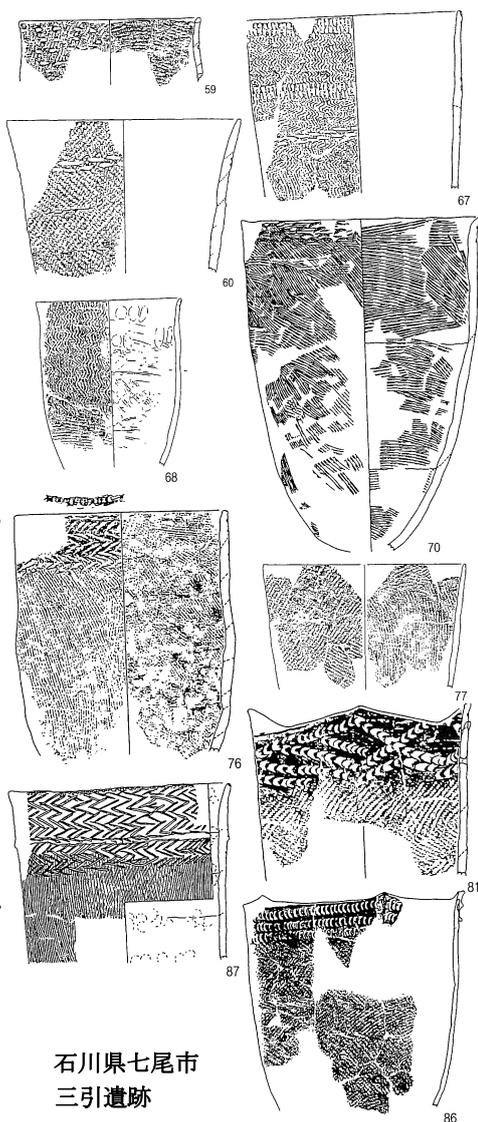
石川県加賀市  
柴山潟底縄文貝塚



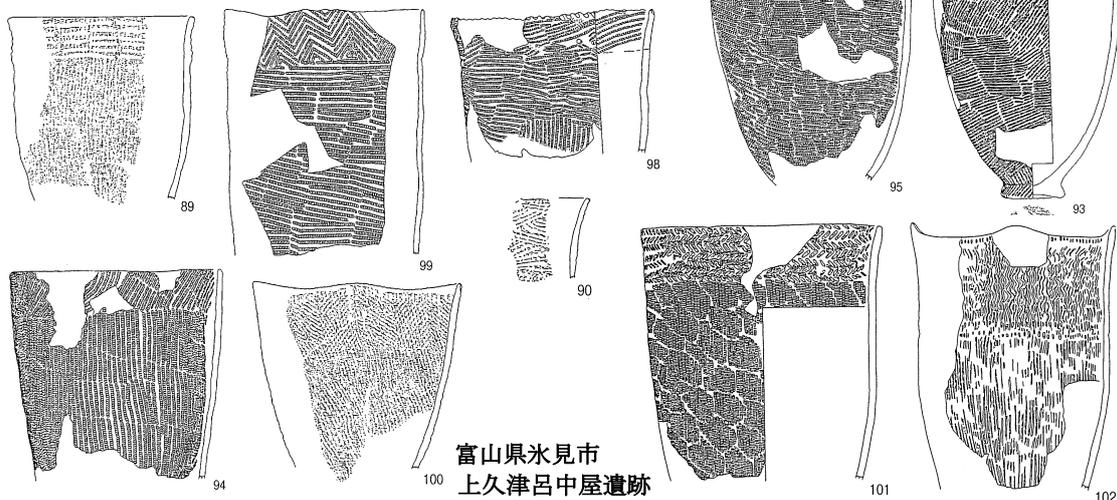
石川県小松市六橋遺跡

一方、縄文施文土器に加えて、条痕施文の土器も在地土器の一つとしてみる事ができる。それは、条痕の施文方向が縦位・横位と縄文の条方向と類する点と、波状となる貝殻条痕を縦位に施文する土器の存在である。桑野遺跡ではV群3類に含めた225の1点が出土しており、六橋遺跡でも1点、三引遺跡67・68や上久津呂中屋遺跡102に示したように、この種の条痕施文土器も北陸一帯に分布し、三引遺跡や上久津呂中屋遺跡では量的にも安定している状況がある。付け加えるならば、貝殻腹縁による刺突施文の土器も在地土器として挙げる事ができよう。ただし、これら特徴的な土器群は、従来から時間的な差異を示唆されており、再検討が必要である。

桑野遺跡出土の概期土器群は、早期の粕畑式から前期の花積下層I式併行期までの時間幅にあり、その主体は入海II式・石山式にあると考えられ、それに伴う在地土器で構成されていることは先に述べてきたとおりである。周辺地域の各遺跡と比較すると、その土器内容は北堀貝塚や柴山潟底縄文貝塚、六橋遺跡とほぼ同様であるが、三引遺跡の時間幅と本遺跡の時間幅の差異からすれば、在地土器の新旧についても指摘できよう。同時に、桑野遺跡での在地土器の内容的・量的な面からすれば、仮称「桑野式」とする在地土器型式の設定も視野に入れて、今後の研究への取り組みを考えたい。



石川県七尾市  
三引遺跡



富山県氷見市  
上久津呂中屋遺跡

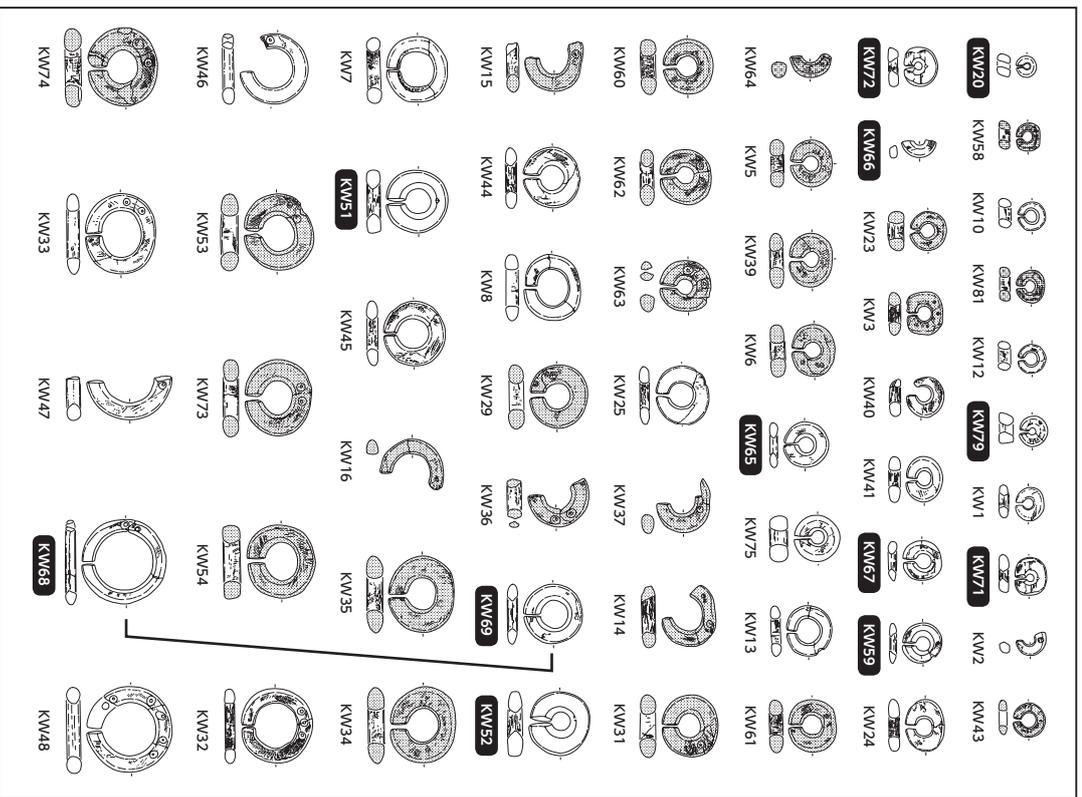
## 墓域と玦飾から見た桑野遺跡の集団構成

藤田富士夫（敬和学園大学人文社会科学研究所客員研究員）

1. 桑野遺跡では環状を基本とする合計71点の玦飾が出土している。松井政信氏によって外径が認識できる玦飾57点が集成されている（『桑野遺跡』82頁）（第1図）。最少個体はkw20（白色材）で外径16.5mm、最大個体はkw48（オリーブ色透閃石）で外径67.6mmを測る。もう一つ最大級にkw68（白色材）があり外径67.0mmを測る。最大から最小までのランクが整っている。大きさや石材（白色材、透閃石、滑石）にバリエーション中に統一性ある秩序を見せる。
2. 第21号土壙や第14号土壙など玦飾の外形や石材に、土壙への納置に際しての「対観念」の規範が強く見られる。この中において第24号土壙では、白色材で構成される玦飾kw68（外径67.0mm）、kw69（外径46.2mm）、と管玉kw70（器長24.0mm）がセットを成している。玦飾は非対称を成す。白色管玉にあっては、「桑野遺跡では3点の（管玉）出土をみるが、この製品のみが石材は透閃石で白色材（TR-wh）のものであり他は滑石製である」（『桑野遺跡』73頁）とされている。
3. 玦飾や石製品を出土した土壙（遺構）は外周半径約8m内に22基を数える。調査を担当した故・木下哲夫氏は第24号土壙に関して「平面的な配置関係から、石製飾玉類が検出された土壙の中心的な位置を占めている」（金津町1995）と述べている。試みに第24号土壙を中心に円を描いてみた（第3図）。第24号土壙は整った円形を成している。
4. 第24号土壙の玦飾は「対観念」の規範から外れている。対観念を優先させればkw47とkw48とkw68が相似形を示す。kw69は、kw51やkw52と相似形を示す。ここで、山田康弘氏の「記念墓」を想起したい（山田2019）。「人間関係の再構築原理」である。仮説となるが、玦飾は集団内の象徴財として、「贈与交換」された可能性がある。土壙群は「記念墓」である第24号土壙（複葬・第二次葬・祖霊祭祀）を中心に置き、少なくとも北域の第20号土壙を中核とするA群と、南域の第18号土壙を中心とするB群から成り立っている可能性がある。両群それぞれが、また「ヘラ状垂飾」を分有しあっているようだ。桑野遺跡は少なくとも2つの集団から構成されている可能性がある。
5. 第24号土壙が「記念墓」であるとすれば、2点の玦飾と1点の管玉が、白色材で構成されており、かかる材質が桑野遺跡の初期成立段階を示すものとなるであろう（第2図）。なお、桑野遺跡の土壙出土状態は、必ずしも耳部装着を示すものではなく、予断を排して、より複雑な納置背景の検討が求められる（藤田2013）。

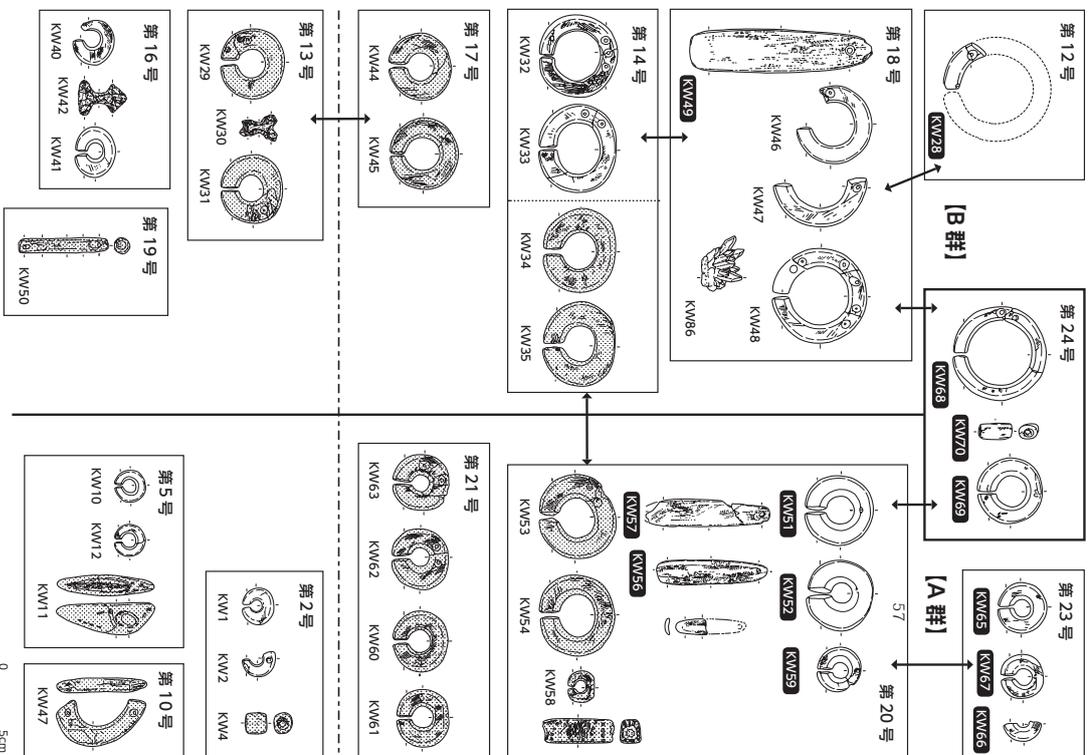
### 「参考文献」

- 藤田富士夫 2013「玦飾の出土状態を実験考古学から考える」『考古学論究』第15  
立正大学考古学会、P21～30
- 山田康弘 2019『縄文時代の歴史』講談社現代新書、P261～278



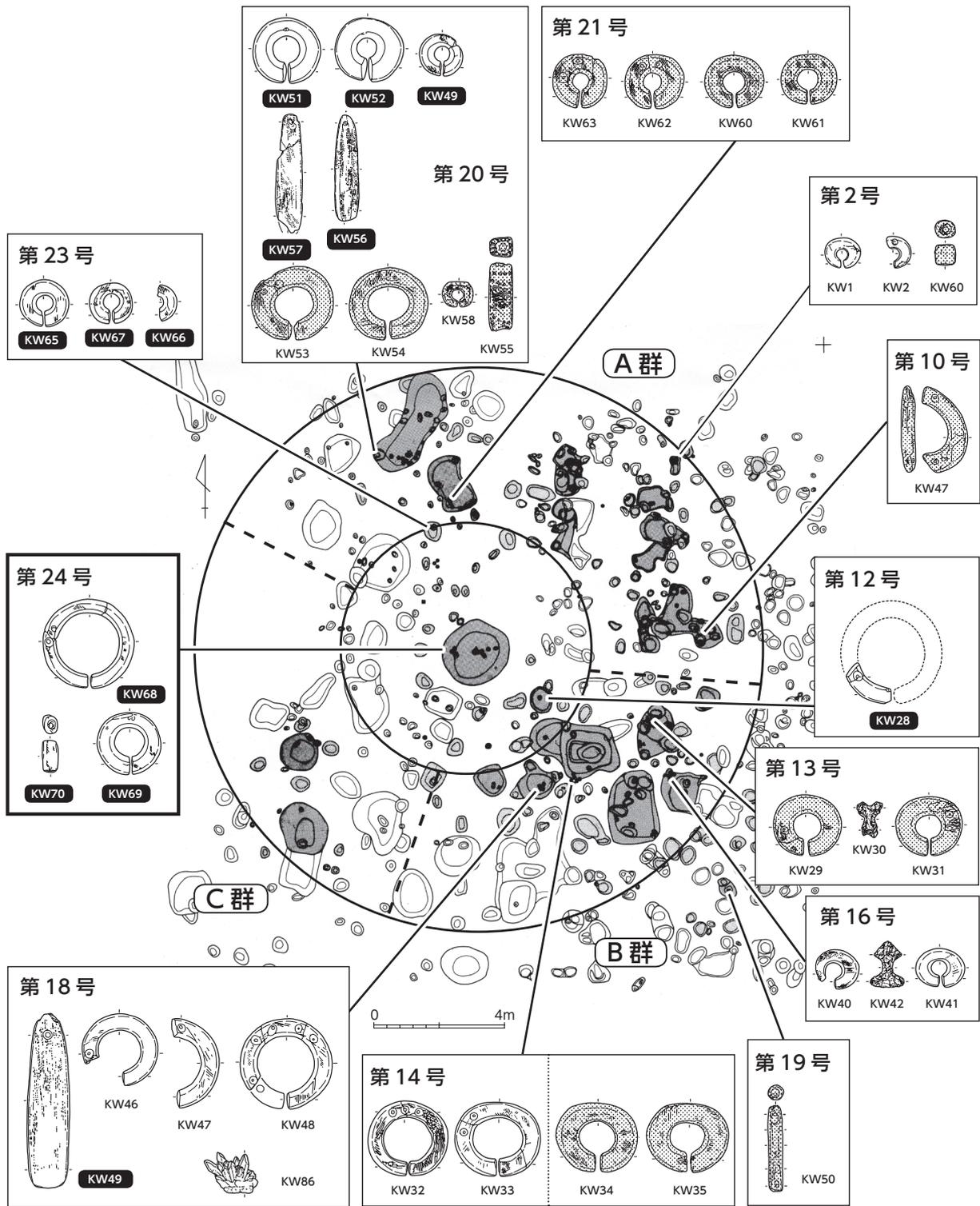
第1図 珠飾単成図

(『桑野遺跡』82頁を基に加筆) 一部部白は透閃石、文字白抜きは白色材、体部網は滑石



第2図 珠飾等飾玉の相関図

(網掛けは滑石材 白は透閃石材 文字白抜きは白色材 一異形石器除く一 ↓は同一型式を志向)



第 3 图 土壤構成概念図

# 未開社会における耳飾の民族誌

高橋 龍三郎（早稲田大学教授）

縄文時代早期終末に登場する玦状耳飾は、意図的に耳朶に傷をつけ、変形・拡張させることを前提にするので、身体加工も併せ持つ。縄文時代の耳飾一般は、子供のうちに耳朶に穿孔し、成長に合わせて大きなものに更新することが想定される（高山 2010）。一般に耳飾装着の目的は、瘴邪等の他に年齢階梯制や社会的役割の変化に伴う通過儀礼的な意味合い、あるいは位階や階層の違いを社会的に公示する機能が考えられる。

一方、玦状耳飾が盛行する縄文前期、中期までと、耳栓型の土製耳飾に移行する中期後半から後晩期の社会では、両者間に大きな社会変革が予想されており（高橋 2014、2017）、耳飾の社会進化上の意義と機能的変化について考える必要がある。

## 1. 耳飾りの機能的意味について

健全な人の耳朶に孔をあけ、石製、土製、骨製、金属製の垂飾りを装着するのは、古今東西を問わず多くの文化、文明にみられる。その歴史の変遷や地理的な分布、文化史上の意義については複雑な内容が予想されるが、先史社会における主な機能的な意義は民族考古学的検討から以下の三つに要約されるであろう。

- 1 人に害悪を及ぼす悪霊や病魔から身体を保護し、耳孔を通じて邪悪なるものが身体内に侵入するのを阻止することを目的に装着するもので、瘴邪、魔除け的なもの。
- 2 個人の成長過程に合わせて通過儀礼ごとに大きな耳飾に変更し、権限や社会的役割などを指示するもの。
- 3 装着する者と、装着を許されない者の区別を明確にし、種類を変えることで、何らかの社会的ステータス（位階・階層）や資格を象徴し表現するもの。

1は部族社会などに事例が多数見られ、背景として邪悪な精霊、死霊、生霊、病魔などが人体の孔から侵入すると信じるもので、そもそも魍魎魍魎や死霊などが頻繁に現世に出没し、しかもそれが自然の営力だけでなく、むしろ人為であると信じる宗教信仰体系を持っている場合がある。アジア・太平洋地域の民族誌を見渡すと、病気や死すら人為であると信じる文化や社会が驚くほど多く、いずれも科学知識が浸透せずに、それに対して呪術や魔術などで対抗する部族社会、首長制社会に特徴的にみられる。

2は、人の成長に合わせた人生儀礼を想定する場合で、通過儀礼を通過した一群の人々は、夫々に年齢階梯制のもとにカテゴライズされる民族誌例は多数ある。縄文時代においても大変興味ある問題だが、社会が氏族社会を形成した後に出てくる制度的特徴のように思われ、それが隆盛を極めるのは縄文後期以降になってからと考えられるので、早期に位置する桑野遺跡で該当するかは注意を要する。

縄文時代後晩期の我孫子市下ヶ戸宮前遺跡の土製耳飾りを分析した杉山絢香氏（杉山 2010）によると、口径規模に応じていくつかのカテゴリを構成するというので、成長に合わせて人生の節目ごとの儀礼を想定し、それに合わせて耳飾りを新たなものに取り換え

た可能性が示唆される。

3は一定の個人的業績や達成により、無資格の者と区別するための勲章、表徴である。個人の位階を表示するための装置でもある。フィリピン人のイロンゴット族(Ilongot)の男は、敵首した経験を誇るためサイチョウ(hornbil)の嘴で作った赤い耳飾りを装着する(R. Rosaldo 1986、佐野 1990)。敵首したことのない男は装着を許されない。男の武勇を示す表徴であるが、一方では文化的概念である *amet* を得るための資格であり耳飾りを装着するための条件でもある。男たちは敵首を行ってサイチョウ嘴製耳飾りを装着するのである。その場合、耳飾りは敵首という基準をクリアしたことの証明であり、*amet* への有資格者である。この点を考慮すると、縄文早期に該当するよりも、むしろ後期以降の氏族社会内容に近い。

## 2. 桑野遺跡にみる耳飾りの大きさの違い

桑野遺跡の塊状耳飾りにみる小型のもの(2cm前後あるいは2~3cm)は子供用と理解してよいだろうか。大型のものと等しく滑石、乳白色の石材を用いており、その点で大きさによる格差はないようである。見栄えのする石材を用いていることから、特別な子供に与えられたと理解する意見もあろうが、しかし、早期段階で、特別の子供に予め付与(*ascribe*)される位階があったとは考えにくい。幼少の頃に耳朶に穿孔しても、孔が塞がらないように小枝などを通しておき、成人に達してから本格的な耳飾りに切り替える民族例もある。小型のものも成人が装着した可能性がある。早期段階の装着の意義は、位階や特殊なステータスを表示するためというよりは、有害なる精霊、病魔が侵入することを防ぐことに重点があったのかもしれない。しかし、広く列島の塊状耳飾りの分布を眺めると、一つの集落で構成員全員が装着した様相は看守できない。本来的に壁邪が目的であるならば、大多数の構成員が装着すべきであるが、他の遺跡を観察する限り、そのような特徴は観察されない。その点で桑野遺跡にみるように大きな割合で装着する場合との違いを考えてみる必要がある。また小型のものを子供用とみなす見方は改めて検討すべきであろう。

## 3. 社会の複雑化状況と資格との関係

耳飾りが壁邪などの呪術と関係する一方で、イロンゴット族の様な位階への条件をクリアした有資格者を示す場合がある。後者の場合、既にその社会が位階に基づく個人の評価が確立した社会であることが条件になる。無頭社会のように位階や頭目などが存在しない社会では、それらの証明も必要ないわけで耳飾りがそのような社会的表示装置として機能することはないと判断される。

社会複雑化過程や階層化過程が進展した縄文後期には、位階に基づく社会的評価が確定した可能性が大きく、着用する装身具でそれを示すことはあり得ることである。中期の鹿角製腰飾や、イノシシ牙製の腕輪、イルカ顎骨製の腰飾などは、社会的な地位のうちで、地縁的よりも、むしろ血縁集団内の地位や役割を表示した可能性が高い。しかも装着者は圧倒的に男性の方が多い。後期のそれらレガリア(位階表示装置)とみられる製品中に、塊状耳飾りはない。塊状耳飾りは中期に土製耳栓に変形して引き継がれたとみる見解が大勢を占めている。耳飾りの型式変化の時期が中期から後期の社会変革の時期(複雑化、階層化過

程の変革期)に重なるのは大変興味ある点である。耳栓型の土製耳飾は、土偶の装着例に見るように女性に顕著である。それは関東地方の後期が広く母系制社会に変革したことと関係しているように見える。女性を中核とする社会組織原理の上で、何らかの社会的資格や位階の発達があり、それが耳飾の種類や質に反映した可能性を今後検討すべきであろう。

#### 4. 社会複雑化の進展と霊的世界

壁邪の視点から見る場合、早期末・前期の玦状耳飾と中期後半期に現れる耳栓状の土製耳飾りとは、実際に機能の上で大きな違いがないように見られる。しかし、重要なのは土製耳飾が盛行する中期から後晩期までの社会が、複雑化、階層化過程において先行する早期、前期と異なっていた可能性が大きく、全体を同じ状況と見なして敷衍化できない点である。

そのような視点からすると、中期に土製耳飾が出現する社会的契機は、社会の複雑化に伴う親族構造や出自制度の変革と関係しているように見える。大家族制度などの非単系出自社会は、単系出自社会が出現する以前、縄文早前期～中期の親族形態として想定できるが、耳栓型に変革する時期は、まさに単系出自社会が生まれた時代、あるいはその過程にある時期と考えられ、土製耳飾への移行そのものが社会状況の変化に対応している様に見える。

縄文早期における霊的なものの扱いや考え方については不明な点が多く、その時期の「邪悪なる霊」が具体的にどのようなものかについては推測する他ない。しかし、社会の複雑化の進展した縄文後期以降になると、氏族制社会に入り実態がやや明らかになる。邪悪なる霊とは、自分たちの生存を脅かす他の氏族の邪悪なる呪いや邪術という場合が多いし、それから自集団の保護する先祖霊との対立関係も含まれる。氏族社会とは、自らと同じ集団に対しては協調関係を維持し、団結的な勢力として機能する反面、他出自集団に対しては排他的特徴をもち、緊張関係も稀ではない。メラネシアなどでは、隣り合う集団であっても、出自が異なれば魔術や呪詛などを仕掛け、霊的な攻撃に及ぶことも稀ではない。したがって、身体に侵入する邪悪な霊には実に人為的なものが含まれることを念頭に入れた方が適切であるように考えられる。

#### 引用参考文献

- 高山純 2010 『民族考古学と縄文の耳飾り』ものが語る歴史 19 同成社
- 杉山綾香 2010 「デザインからみる縄文時代後晩期の土製耳飾りー千葉県我孫子市下ヶ戸宮前遺跡の事例からー」『先史学・考古学研究』21号 筑波大学佐野敏行 1990 「衣に関連する文化人類学的研究の進展ー外国文献の解説をとおしてー」『繊維製品消費科学』vol. 31 no.7
- 高橋龍三郎 2014 「縄文社会の複雑化」『講座 日本の考古学4 縄文時代(下)』今村啓爾編 青木書店
- 高橋龍三郎 2017 「縄文社会の複雑化と民族誌」『縄文時代ーその枠組み・文化・社会をどう捉えるか?ー』吉川弘文館 山田康弘編
- Rosaldo, R. 1986 Red Hornbill Earrings: Ilongot Ideas of Self, Beauty, and Health. *Cultural Anthropology* vol.1, No.3 pp. 310-316

## 桑野遺跡の概要

橋本 幸久（あわら市郷土歴史資料館館長補佐）

### 1. 遺跡の立地

桑野遺跡は、JR芦原温泉駅の北東にあたる、福井県あわら市自由ヶ丘二丁目（調査時：坂井郡金津町北金津91字桑野、同125字桑野山、高塚41字向山）に位置し、本市と石川県加賀市にまたがる加越台地東南縁に接した標高20m前後の低丘陵上に所在した。この地は、日本海へと注ぐ九頭竜川の河口から約9km東に入った地点である。

右は、昭和50年以前に撮影されたとされる遺跡周辺の航空写真である。中央やや西寄りの緑に覆われた一見独立丘陵状を呈するのが桑野遺跡である。その北方丘陵上には同じ縄文時代の遺跡である高塚向山遺跡も所在している。両遺跡中間の東側の更に低い丘陵上には古墳時代～律令期頃の山室下向遺跡も存在しており、これらの3遺跡に囲まれた地区は、深田であることが知られていた。



昭和50年以前の桑野遺跡付近の航空写真  
(上が北)

### 2. 調査に至る経緯

桑野遺跡は、主に土地区画整理事業計画に伴い、事業区域内に周知の埋蔵文化財包蔵地である高塚向山遺跡の南端が含まれていたことから、南側の独立丘陵状を呈する丘陵上部平坦面で平成2（1990）年12月21日に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにより実施された確認調査でその存在が明らかとなった。その確認調査で、縄文土器片が僅かに検出され、遺構も散漫ながら分布が確認されたことから、本発掘調査の必要性が生じ、急遽発掘調査団が組織され、平成4（1992）年から発掘調査開始となった。

### 3. 調査の経過

当初は、全面調査の予定ではなかったため、初年となる平成4（1992）年度の調査面積は丘陵上部平坦面Nラインまでの約2,400㎡であった。

しかし、調査範囲の南西端付近で縄文時代前期頃に盛行した珧状耳飾などの石製装身具の多数及び集中検出により、遺跡の重要性が増大したことから、平成5（1993）年度には、

丘陵上部平坦面Nライン以西ほぼ全域となる約 6,400 m<sup>2</sup>もの調査面積となった。



平成5年度第1回目航空写真撮影（北方から）

上は、平成5（1993）年7月の航空写真測量撮影時の写真で、報告書掲載の同年2回目の平成5年度調査区近景写真では、工事進捗に伴う土取りにより既に削平されていた、Pライン以西と13ライン以北調査後の様子である。

計画では、平成5年度で発掘調査を終了する予定であったが、平成4年度調査後に丘陵が削平された箇所に残るK11杭周囲の高まりに貝が散乱しているのを発見した。そこで、その周囲を精査した結果、貝塚であることが判明した。この貝塚の発見に伴い、他の丘陵斜面も改めて精査したところ、Oライン北側斜面でもブロック貝層を検出した。そこで、発掘調査が継続され、同年度に貝塚部分の調査を実施した。こうして、3カ年に渡る発掘調査が終了し、最終的な調査面積は、丘陵上部平坦面のほぼ全体となる約 8,800 m<sup>2</sup>と北側斜面で不時発見した2箇所の貝塚約 300 m<sup>2</sup>の計約 9,100 m<sup>2</sup>となった。

#### 4. 調査の概要

調査では多くの遺構を検出し、縄文時代早期末から近世にまで至る複合遺跡と判明したが、中でも縄文時代の土壙群は丘陵上部平坦面の調査区南縁の東半に展開する。本遺跡の中核を占める珧状耳飾などの石製装身具を含有した土壙は、M～nライン、18～21ラインの東西約 15m、南北約 15mの計約 300 m<sup>2</sup>の範囲に偏在、密集する様相を呈していた。

しかし、土壙群周辺を含む丘陵上部平坦面からは珧状耳飾が盛行した縄文時代早・前期

の土器は極めて少なく、縄文時代中期以降の土器の出土が多かった。

北側斜面のn 6区、O 5～6区には、複数のブロック状を呈した地点貝塚、北東斜面のK11 杭周囲には斜面堆積をなす北東貝塚が存在した。北側地点貝塚はブロック貝層1の最上部を標高約10.6mで確認したが、最も低い北西のブロック貝層9の貝層下部では標高約7.7mで検出した。北東貝塚は、発見時には上部が削平されていたが、主体となる第1貝層は標高8m前後に位置し、差し渡し約3m、厚さ約0.8mの範囲に堆積していた。

第1貝層下からまとめて出土した土器は、殆どが縄文時代早・前期の土器で占められていた。本遺跡における早期末から前期初頭の出土土器は、特に東海地域の諸型式に類似する土器が多いが、早期の粕畑式から前期の関東地域の花積下層I式並行期までの時間幅にあり、その主体は入海Ⅱ式・石山式と、それに伴う在地土器で構成されており、遺跡の主体時期の可能性がある。

貝塚の自然科学分析によると、貝類はヤマトシジミを主体に構成され、比較的大型であった。少量のカキ・サザエなどが混在する。は虫類はヘビ類のみ、鳥類はコガモなど数点、魚類は淡水系としてはコイ、ウグイが多く、内湾魚としてはクロダイ、スズキが多いが、外海系の魚種はみられなかった。獣類ではイノシシが最も多く、次いでシカであった。他に骨針や刺突具などの骨角製品や巻貝輪切り品などの貝製品も確認された。人骨も少量出土している。数少ない日本海側の縄文時代前期頃の貝塚として貴重な成果となった。

本遺跡出土の石器・石製品のうち、国指定重要文化財は全85点で、その内訳は玦状耳飾71点、篋状垂飾5点、棒状垂飾1点、鯉節形垂飾1点、腕輪状垂飾1点、大珠1点、管玉3点、異形石器2点であった。うち、大珠のみq13区の包含層出土で、その他の石製装身具は前述した密集区内の1号から27号までの27基の土壌かその近辺から出土した。その後、1号と2号、6号と7号、21号と22号土壌は一体と見做し全24基とした。また、23号は掘り込みを確認できておらず、他の土壌も深度は10cm前後と浅い。

石製装身具の多くは、ほぼ原位置に近い状態で出土しており、埋葬時の状況や装身具の組み合わせを考察する好例である。玦状耳飾は対となるものが同一素材、製作技法で揃えられた例が多く、異なる装身具が同じ土壌から検出されるなど多様な状態を呈していた。

装身具の石材は、比重測定不可のため確定しないが、異形石器2点を除く83点の内訳は、透閃石岩42点、滑石41点に大別された。うち白色材と注目していた品は透閃石岩と思われ、海外渡来の石材である可能性が考えられるという。

遺跡出土の縄文時代の石器総数は885点で、内訳は石鏃238点、石槍9点、異形石器6点、石匙11点、打製石斧72点、磨製石斧49点、環状石器2点、削器2点、不定形石器2点、切目石錘7点、打欠石錘329点、石皿2点、磨石類156点であった。特に打欠石錘と比べ切目石錘が極めて少ないことが特徴である。

本遺跡は、縄文時代以降も存続し、弥生時代以降の円形周溝状遺構2基、集石遺構1基、溝状遺構、ピット等を多数確認し、掘立柱建物2棟も検出した。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、越前焼、磁器なども少量出土している。

また、報告書未掲載ながら石剣や管玉等も出土しているので、後日報告したい。

